

## アレクサンドリアのクレメンス『ストロマテイス』 (『綴織』) 第7巻：全訳

著者	秋山 学
雑誌名	古典古代学
号	6
ページ	35-113
発行年	2014-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/120809">http://hdl.handle.net/2241/120809</a>

アレクサンドリアのクレメンス  
『ストロマテイス』（『綴織』）第7巻  
—全訳—

秋山 学

序.

初期ギリシア教父の一人、アレクサンドリアのクレメンス（150–215）の著作めぐり、筆者は本学の紀要を借りてその全訳作業を進めてきた。すでに『プロトレプティコス』（「ギリシア人への勧告」；全1巻）、『パイダゴゴス』（「訓導者」；全3巻）については、訳出を終えている<sup>1</sup>。クレメンスの主著に当たる『ストロマテイス』（「綴織」；全8巻、ただし第8巻は偽作でないとしても刊行を意図していないメモ書きだとされる）に関しても、すでに第3巻まで訳出公表を終えている<sup>2</sup>。今回同時期に公表するのは、同著の第4巻、第6巻および第7巻である<sup>3</sup>。第5巻が省かれるのは、すでに1995年2月の時点で、平凡社より刊行された『中世思想原典集成』第1巻「初期ギリシア教父」の中に、拙訳によるものが収められているためである<sup>4</sup>。

さて本『古典古代学』第6号には、『ストロマテイス』（「綴織」）第7巻の全訳を収

---

<sup>1</sup> 「アレクサンドリアのクレメンス『プロトレプティコス』（『ギリシア人への勧告』）—全訳—」，筑波大学大学院人文社会科学研究科文芸・言語専攻紀要『文藝言語研究 文藝篇』57, 1–82, 2010.3；「アレクサンドリアのクレメンス『パイダゴゴス』（『訓導者』）第1巻—全訳—」，同『文藝言語研究 文藝篇』59, 1–62, 2011.3，「アレクサンドリアのクレメンス『パイダゴゴス』（『訓導者』）第2巻—全訳—」，同『文藝言語研究 言語篇』59, 1–74, 2011.3，「アレクサンドリアのクレメンス『パイダゴゴス』（『訓導者』）第3巻—全訳—」，筑波大学大学院人文社会科学研究科古典古代学研究室刊『古典古代学』第3号，25–76, 2011.3。

<sup>2</sup> 「アレクサンドリアのクレメンス『ストロマテイス』（『綴織』）第1巻—全訳—」，筑波大学人文社会系文芸・言語専攻紀要『文藝言語研究 文藝篇』63, 63–163, 2013.3，「アレクサンドリアのクレメンス『ストロマテイス』（『綴織』）第2巻—全訳—」，筑波大学人文社会系文芸・言語専攻紀要『文藝言語研究 言語篇』63, 147–223, 2013.3，「アレクサンドリアのクレメンス『ストロマテイス』（『綴織』）第3巻—全訳—」，筑波大学大学院人文社会科学研究科古典古代学研究室刊『古典古代学』第5号, 27–93, 2013.3。

<sup>3</sup> 「アレクサンドリアのクレメンス『ストロマテイス』（『綴織』）第4巻 —全訳—」，筑波大学大学院人文社会系文芸・言語専攻紀要『文藝言語研究 文藝篇』65, 2014.3 刊行予定，および「アレクサンドリアのクレメンス『ストロマテイス』（『綴織』）第6巻 —全訳—」，筑波大学大学院人文社会系文芸・言語専攻紀要『文藝言語研究 言語篇』65, 2014.3 刊行予定，

<sup>4</sup> アレクサンドレイアのクレメンス『ストロマテイス』第5巻（上智大学中世思想研究所編訳／監修『中世思想原典集成1 初期ギリシア教父』283-416），平凡社，1995.2。

める。こうして、クレメンスの主著である『ストロマテイス』について、第8巻の訳出は措くとして、第5巻の公表からおよそ20年弱の月日を経て、その全貌を公表することができるのは望外の喜びである。さらに、筑波大学古典古代学研究室より定期刊行物のかたちで継続刊行してきた『古典古代学』誌に、『ストロマテイス』の掉尾とも言うべき第7巻の拙訳を掲載することができるのも感無量である。

本第7巻では、クレメンスによる「覚知（者）」の神学思想の核心部が語られる。クレメンスの神学は、言うまでもなく「正統グノーシス主義」のなかに位置づけられる思想であり、正統教会の教義を逸脱するものではない。ただそこに見られるのは、クレメンスがおそらく教会内の位階制聖職者ではなく、教理学校（ディダスカレイオン）で教鞭を執る一神学者であったとされることとも合致して、教会組織からは発想上の拘束を受けずに展開される「覚知者」の地平である。それは、他ならぬ著者自身が到達した霊的次元の吐露であると考えて間違いない。おそらくギリシア教父文献史の中でも、これほどまでに独自の地平を開陳して見せた神学者はあるまい。

邦訳に際し、底本としてはオットー・シュテーリン（Otto Stählin, 1868–1949）の校訂になる校訂版テキスト（*Stromata Buch VII und VIII ; Excerpta ex Theodoto ; Eclogae Propheticae ; Quis dives salvetur ; Fragmente / Clemens Alexandrinus ; herausgegeben im Auftrage der Kirchenväter-Commission der Königl. Preussischen Akademie der Wissenschaften von Leipzig: Hinrichs, 1909; Die Griechischen christlichen Schriftsteller der ersten drei Jahrhunderte; Clemens Alexandrinus, Bd. 3*）を用いた。なおルートヴィヒ・フリュヒテル（Ludwig Früchtel）らの改訂になる1970年の第2版については参照していないが、典拠箇所指示の充実が図られたものと思われるので、教文館版（「キリスト教教父著作集」）刊行のための見直し作業の際に活用したい。近代語訳としては、イタリア語訳（*Clemente Alessandrino, Gli Stromati: Note di vera filosofia, Introduzione, traduzione e note di Giovanni Pini, Milano 1985*）およびA. Le Boulluecの仏訳（SC428, Paris 1997）を参照した。また各章の冒頭に掲げた内容小見出しは、ミーニュ版のラテン語訳から適宜採用したものである。

## I. 真の敬虔さとは。

1.1) すでにわれわれは、ギリシア人に対し、覚知者（gnōstikos）だけが真に神を畏れる者であるということを提示した。今度は、いったい誰が真なるキリスト者である

かを哲学者たちが学び取り、自らの無学を認めることができるようにすべきときに至った。キリスト者に対し、キリストの名の故に迫害を行う者たちは、やみくもにまた行き当たりばったりに行っているものであり、真に神を認識している者たちのことを「神を知らぬ者」と呼ぶ棄てるのは、無意味なことなのである。2) 思うに、哲学者たちにあっては、もっと明晰な論拠を用いることが相応しい。それは彼らが、たとえ自らが信じる力に与かるに値しないということを明らかにしようとも、彼らの許なる教養により、すでに鍛錬を受けている者として、耳を傾けさせるようにしうするためなのである。3) しかるにわれわれは、預言者の言葉をいまここで思い起こすことはせず、後ほど適切な箇所では聖書を引用することにしよう。それらから明らかになる事どもに関しては、キリスト教について描き出す際に、箇条書き状に示すことにするが、それは、聖書を引用することでわれわれが論述の連続性を断ち切らないようにするため、またそれらの事柄を、聖書の言辞を理解せぬ者どもに提供しないようにするためである。だが、われわれがその意味するところを明らかにしたあかつきには、その充溢により、信じる者たちにはその証しの言葉が明らかとなるであろう。4) (たとえ、われわれによって語られる主の書き物が、多くの者たちには異質なものに映ろうとも、そこにおいて聖書の言葉は息づき生きているのだということを知るべきである。そしてそれらから端緒を得るのは、言辞ではなくただ理性だけであるということを告げねばならない)。5) というのも過度の詮索は、時宜を得ずに行われた場合、余分であると思われて当然であるし、重要な事柄をまったく検討しないというのは、戯言であり不完全なものに他ならないからである。6) まさしく＜主の証しの言葉を尋ね求める人々は幸い、彼らは心を尽くして主を捜し求める＞(詩篇 118,2)。しかるに律法と預言者たちは、主について証しするものである。

2.1) さて、われわれにはただ、敬虔にして崇仰の念に満ち、真に神なる方に対して神に相応しい崇敬を行う覚知者のあり方を提示することだけが課せられている。神に相応しいあり方には、神に愛され神を愛することが伴う。2) 実に、価値に関して卓越したものはすべて、崇高なるものと考えられる。そして支配者たち、両親、その他年長のものはすべて、感覚面において尊敬されるべきである。一方教えられたもののなかでは、最も古代に遡る哲学、最も年長なる預言が尊重されるべきである。そして思惟世界にあっては、生まれにおいて最も年長なる存在、時間を超絶し支配されることなき始原、諸々の存在物の初穂たる御子が崇敬されるべきである。3) この方を通じて、

超越的原因，すなわち万物の父を学び取ることが可能である．この方は最も原初にあり，万物にのうちに最も慈しみに満ち，もはや声によって伝えられる存在ではなく，畏敬と沈黙のうちに，聖なる驚愕をもって最も崇敬され畏怖されるべき方である．そして主によって，学びを終えた者たちに耳傾けることのできる方として語られ，主における覚知に向けて選び取られた人々に思惟される方である．この選び取られた人々とは，使徒が＜感覚器官に関して鍛錬された人々＞（ヘブライ5,14）と述べている者のことである．

3.1) さて神への奉仕（*therapeia*）とは，覚知者にあつて，靈魂への休むことなき配慮であり，また彼の内なる神性に対し，間断なき愛をもって関わることである．2) 人々に対する奉仕としては，成長させる向きのものと，仕える向きによるものの二種がある．まず医術は身体に関しての，また哲学は靈魂に関しての，成長させる向きでの奉仕である．一方両親には子供たちから，また指導者たちには臣下の民から，仕える向きでの奉仕が向けられる．3) 教会にあつても同様に，長老・司祭は成長させる向きでの似像をまっとうするが，執事・助祭は仕える向きでの奉仕に挺身する．4) これら二つの奉仕のあり方に関して，地上での事どもをめぐり経綸に従い，天使は神に仕えるが，それは覚知者に関しても同様である．まず神には仕える．一方人々に対しては，成長させる向きでの観想を示すが，それは人々の矯正のため，命じられたあり方で教育するためでもある．ただ麗しくかつ誤りのないかたちで，人間的な事どもに関して神に助力する人だけが，敬神の念溢れる人だからである．5) というのもたとえば，植物への最良の仕えとは，それによって実が生じ収穫されるように，農学的な知識と経験を活かして，そこからの益を人間に提供することであるが，ちょうどそれと同様に，覚知者による敬神の念とは，彼を通して信ずる人々の実りを，その思いへと集約し，より数を増しそれによって救われる人々の認識のうちに，経験を通じて最良の収穫を挙げるからだからである．6) しかるに神に対する畏敬の念（*theoprepeia*）とは，神に似つかわしいことをまっとうする習性である．そしてこの神に対する畏敬の念に満ちた人だけが，神に愛される人なのである．この人こそ，知識と生活とによって，この似つかわしき事柄が，どのようにすれば来たるべき人によって生きられるか，あるいはすでに神に似たものとされた人によって生きられるかを知悉した人なのである．

4.1) 実に，神を愛する人はこのようなあり方をとる．父を尊敬する人が父を愛する者であるのとちょうど同じように，神を尊敬する人は神を愛する者である．2) かくし

てわたくしにも、覚知の力による働きとは三種があるように思われる。まず第一は事柄を認識すること、次に御言葉が示唆する事柄を完遂すること、そして第三に、真理の許に隠されている事柄を神に相応しいかたちで伝達できること、以上である。3) かくして、神とは全能なる方であるということを信じ、神的な神秘を御一人子なる方から学び取った者が、どうして無神論者であるはずがあらうか。無神論者とは神が存在しないと考える者であり、迷信深き者とは神霊を恐れる者のことである。この人間は万物を神格化し、樹木・石、そして理性的な生活をせず奴隷のようなあり方にある人間の息吹をも、神と見なす者である。

## II. 神の子は、父によって定められた万物の支配者であり、 自ら人間のことを気遣い、かつ救い主であること。

5.1) 実に、信仰とは神を知ることのうちにあり、そのまず初めは、救い主の教えを伴って、いかなる仕方でも不正を行わないという確信を得て、これこそ神の認識 (epignōsis) に適うことだと考えることである。2) このような仕方こそ、地上にあっては最も敬神の念に満ちた人間がもっとも力強く、天上にあっては天使が最も力強く、場所的により近くまたすでにより浄らかなかたちで、永遠にして至福なる生命に与ることが可能である。3) しかるに子としての本性こそ、最も完全にして最も聖性に満ち、最も主導的かつ最も指導的であり、最も王的で最も慈善に満ちており、唯一全能なる方に最も近いあり方である。4) このあり方こそ最高の秀逸さであり、万物を父の意向に従って支配し、すべてを最良のかたちで導き、疲れを知らず倦むことのない力ですべての働きを為し、それを通じて隠された想念を照らし、働かせるものである。5) というのも神の子は、決して自らの高みを逸脱することなく、それを分割することも切り取ることもなく、ある場所からある場所へと移動することもなく、あらゆる場所に何時いかなるときにも遍在し、決して限り取られないからである。それは知性のすべて、父の光のすべて、眼のすべてであり、万物を見そなわし、万物を聞き届け、すべてを知り、力でもって諸力を探索する方である。6) この方に、天使たちと神々とのすべての軍勢は従う。この方は聖なる経綸を受け取った父の御言葉である。＜支配する方を通じて＞ (ローマ 8,20) ,すなわちこの方を通じて、すべての人間がこの方のものとなる。もっとも人間には、すでに＜認識による＞者たち、一方いまだに認識を得ていない者たち、また友の如き者たち、忠実な僕のような者たち、そし

て単なる僕であるような者たちがある。

6.1) この師は教育の際、覚智者に対しては秘跡を、信仰者に対しては善き希望を、心頑なな者に対しては感覺的働きを通しての矯正的教育を用いる。その際、先慮 (pronoia) は私的にも公的にも、いたるところに見られる。2) 神の子が存在すること、そしてこの方が救い主であり、われわれが述べる主であるということについては、言うまでもなく神の預言が提示している。3) したがって万物の主は、ギリシア人・異邦人を問わず、その望む者たちを説得する。というのも自らの立場にある人が、救いを得る際に、希望に与ることができるということに加え、選択意志により、自分の許にある事どもをすべて満たすということが強いられるわけではない。4) この方は、ギリシア人たちのためにも、幾分劣った地位の天使たちを通じて哲学を伝えた方である。というのも神的また古代に遡る命により、天使たちは諸民族に配されているからである。5) だが信じる者たちの栄光は「主の取り分」に属す。5) というのもこれは、主がすべての人々を氣遣ったわけではないか（これもまた、不可能であるが故に主は受難を被ったのか〜これは許されない、なぜなら主の弱さの徴であるから。あるいは可能であったのにそれを望まなかったことによるのか〜だがこれでは受難が善きことに属さなくなる。いずれにせよわれわれのために受難を被る肉をまとった方は、放埒さゆえに不注意であったわけではない）、もしくはすべての人々を氣遣っているかのどちらかによる。だが後者のほうが、万人の主と成られた方には相応しい事柄である。6) というのも主が救い主であるあり方は、ある人々にとっては救い主だが他の人々にとってはそうでない、といった類のものではない。さらに主は、各々の者が有している必要性に応じて、自らの慈しみを、ギリシア人・異邦人に、そして彼らのうちの予め定められている人々、個々固有の時機に招かれた信徒・選ばれた人々に、分かち与えたのである。

7.1) さて、すべての人々を等しく招く方は、誰をも決して妬むことがない。ただ選ばれた人々を招くに際しては、その選ばれた仕方では信じる者どもに貴さを分かち与える。しかるに万物の主、特に善性に満ちた全能なる父の意向に仕える方は、他のいかなる者にも妨げられることがない。2) そして原初より無情動の方となった主には、妬みを取り付くことは決してない。したがって人間界の事どもは、主に照らすとき妬みの関わるものであるはずがないのである。したがって妬みを抱く者は、情動が取り付いた者であり、別人である。3) そして「主は無知のゆえに、どのようにして各々の者

を氣遣うべきであるのか知らず、人間性を救うことを望まなかったのだ」などと述べることは不可能である。4) というのも、世が創られる以前から父の助言者となっていた子に、無知が取り付くはずはないからである。この子とは、全能なる神が＜そこに喜びを見出した＞(箴言 8,30) 知恵なのである。なぜなら子は＜神の力＞(1 コリント 1,24) であり、すべて成ったものの前にある最も古き父の御言葉であって、父の＜知恵＞と呼ばれるのがまったく相応しいし、父によって創造された事物の「師」とされるのが似つかわしい。5) かくして彼は、いかなる快樂によっても逸らされることがなく、人間への心遣いを決して放棄することがない。実にこの方は、本性的に情動を被る肉を身に帯び、無情動の習性にまで教育した方である。6) いったいどうして、万物の救い主また主である方以外に、救い主また主がありうるだろうか。だがむしろ彼は、信じる人々に対しては、知ることを望むということを通じて救い主となる一方、信じない者たちに対しては、その主となる。それは彼らが、この方によってそれぞれに固有で相応しい慈しみの業を獲得し、自ら告白することができるためである。7) しかるに主の働きはすべて、全能なる方に向けて奉獻されるのであり、子はいわば、父の現実態(energeia)なのである。8.1) かくして救い主は決して人間を憎む方ではない。この方は実に、溢れるまでの人間愛によって人間の肉の持つ被情動性を軽んじることなく、かえってこれを自らの身に帯び、人類に共通の救いのために到来したのである。選択意志を行使した人間にとって、信仰は共通なものである。2) しかしながらこの方は決して、他の動物たちと異なって人間だけに固有の業に対しても顧慮を怠ることはなかった。すなわちそれは、神による創造行為の際に想念(ennoia)が込められたという点である。3) 人間に対して統括を行うものとして、神によって定められた想念以上には、より優れまた調和の取れたものは他になかったのである。実に、より優れた存在にとっては、より劣ったものの本性に従って常に考えを進めることが適切である。そしてより劣った者に対する統括は、美しき仕方でこれを果たせる者に委ねられるのが適切である。しかるに神の御言葉・ロゴスまた神の先慮は、真に統率的かつ主導的なものである。これはすべてを見そなわし、自らにとって固有ないかなるものに対しても配慮を怠ることがない。5) これらの者どもこそ、神に固有な選ばれた者どもなのであろう。それは、信仰によって完成された人々である。かくして全能の父の意向により、すべて善き事どもの端緒・原因として子が立てられたのであり、彼こそは運動の第一の力であって、感覚には把捉されえないものである。6) というのもこの「在る



方」(出エジプト3,14), この方は、肉の弱さの故に、受け容れることのできない者どもには見られることがない。むしろこの方が、感覚しうる身体を摂り、掟への聴従によって人間たちに為しうることを示すために到来したのである。

9.1) 父の力というものは、彼が望むものの上に容易に臨んでこれを覆い、自らの統べる範囲のごく微細な部分までも、顧慮せずに済ますことがない。2) 実にそうでなければ、彼にあっては万物がよく為されているということにはならないからである。2) しかるに、思うにすべての部分、その最も微細な部分にまで精緻を極めて及ぶ精査こそ、最大の力に属する。すべてのものは、父の意向に沿って万物の救いを統率する世界の第一の支配者に目を注いでいるが、それぞれが異なった支配者の許に配されている。かくして人は、偉大なる大祭司(ヘブライ4,14)の許に至るであろう。3) というのも、天上界における、父の意向に従って働く唯一なる根源によって第一の事物は支えられ、第二のもの、第三のものがこれに続く。そして現象界の最後・その極みに幸いなる天使の位階があり、われわれ自身に至るまで、それぞれのものがそれぞれ別のものによって個々に、救い取られまた救うものとして配されているからである。4) かくして多くの鉄の指によって目指されているヘラクレスの石の霊と共に、鉄の最大の部分も動ずるのであり、ちょうどそれと同じように、有徳の者どもは聖なる霊に引かれて第一の館に住まい、続いて他のものがこれに続き、最後のものにまで至る。しかるに弱さゆえの悪人たちは、不正な飽くなき欲望のために不健全な状態に陥り、敵を制することも自制することもせず、情動に引きずられるままに破滅し、地面に伏す。徳を望む者を捉えることは、天上界の掟だからである。10.1) それゆえ律法における掟もまた、まだ律法下になかった人々のための律法以前の掟も一なぜなら<律法は義なる者のためにあるのではない>(1 テモテ 1,9) から―、永遠の生命を択び取った者は幸いなる報償を受け取るように定める一方、悪を喜びとなす者には、自ら選び取った者どもと共にあることを認めている。さらに、徳の進捗と義の増大へと刻々優れたものになる靈魂に対しては、すべてにおいてより優れた座を獲得し、それぞれの段階において、無情動(*apatheia*)の状態へと身を伸ばし(*epekteinomenos*)、ついにはまったく人間、知にも嗣業にも卓越した人へと成長するように定めている。2) これら救いの展開は、変化の秩序にしたがって時間・場所・尊厳・覚知・嗣業・奉仕に応じて各々の部分に分かたれるが、ついには主をめぐる絶えざる永遠の観想が立ち上る。3) 自らの観想に向けて導くのは愛であり、自らの全体を覚知への愛により観想へとすべて収

斂させるのである。11.1) それゆえ主は、一つの泉から第一と第二の掟を汲み出し、律法以前の人々を不法だと軽蔑することもしなければ、異邦の哲学を耳にしたことのない者たちが歯止めなく振舞うのを容赦することもしなかった。2) つまり、前者には律法を、後者には哲学を提供し、主の来臨に至るまでの時間、不信仰をく閉じ込めた> (ローマ 11,32) のである。そして主の来臨以降は、信じない者には弁明の余地がなくなった。つまり主は、以上二つの道、ギリシアの道と異邦の道の各々どちらからも、信仰による完成に向けて導いたのである。3) もしあるギリシア人が、ギリシア人の哲学において先行して考察されていた事柄を踏み越え、真なる教えに向けて突き進んだなら、それがたとえ素人であっても、彼は信仰を通じて救いの近道を選んだということになる。

12.1) さて、主は人間にとって選択が自由意志に基づくものであることを妨げない限りのすべてのものが、徳に向けて協働するよう取り計らった。そして何らかの方法で、曖昧にであっても見抜くことのできる人々に対して、真に唯一にして全能なる方が、どのように善き神として現れるかを示した。この方は子を通して世々としえに救いの業を行う方であり、悪に対しては、いかなる仕方であれまったくもって、その原因ではない。2) というのも万物の救いのために、万物の主によってすべてが整えられており、それは全体にだけでなく個々の部分にも及ぶからである。3) かくして救いのための正義の業は、常に優れた方向に向け、各々のものを個々の能力に応じたかたちで前進させるのである。より優れたものの救いのためには、彼ら自身の習性に対して類比的に、より小さな部分に及ぶまで、連続性を取り計らうのである。4) 言うまでもなく、主はすべて徳を備えたものをより優れた住まいへと移す。それは覚知を選択するということを、移転のための理由として有しているものに関してであり、霊魂がその選択を主権として獲得している場合である。5) それを見そなわす偉大なる裁き手にとって、必要不可欠な教育は、傍に仕える天使たち、さまざまな形での選び、ありとあらゆるあり方での裁きを通じ、<落胆した者たち> (エフェソ 4,19) をより善き方向に向け回心させることを推し進める。

III. 真の覚智者は、神とその子にできるかぎり似た者となるように努めるべきこと。

13.1) 主を讃える者は言う、「他の事どもに関してわたくしは口をつぐもう」(アイスキュロス『アガメムノン』36)。ただわたくしが言いたいのは、覚知に満ちた霊魂についてこれは

当てはまらないということである。この靈魂とは、觀想の高貴さにより、生き方に関して、幸いなる神々の住まいを籤で割り当てる並び方などは凌駕し、聖にして聖なる者と見なされるとともに、全体の中からまったき姿で移し取られたものである。さらに彼らは、上席の中でもその上席に至り、神的な觀想をもはや鏡のうちであるいは鏡を通じて受け取ることをせず（1 コリント 13,12）、可能な限り明瞭に、かつ精確なかたちで純粹に、愛を発する靈魂に対し、超本性的に尽くされ得ない觀照を供し、永遠の歡喜を永遠なる形で、終わりなき世に向けて受け取り、まったき卓越性の不変性をもって留まるよう尊ばれる存在である。このようなものこそ、＜心において淨らかな者たち＞（マタイ 5,8）による把捉的な觀想である。2) これこそ、まったき域に達した覺知者の現実態である。彼は偉大な大祭司（ヘブライ 4,14）を通じて神と語らいあい、神へのまったき仕えを通じて可能な限り神に似た者とされている。この仕えとは、人々の救いへと及ぶものであり、それはわれわれに対する親切への留意という点で、公共奉仕・教え・行いで善行によるものである。3) 実に、覺知者は自らを形成しかつ創造するばかりでなく、自らに耳を傾ける者たちを、神に似た者として美しく飾る。本性的に無情動性を獲得したあり方に対し、修練により無情動に向けて整えられたあり方を可能な限り同化させ、主と語らい合いかつ主とともにありながら、これを＜休むことなく＞（1 コリント 7,35）遂行するのである。4) 思うに、溫順さと博愛、高貴さと敬神の念、これらこそ、神への覺知に満ちた同化のための規準である。14.1) わたくしは、これらの徳こそ、神に＜受け容れられるいけにえ＞（フィリピ 4,18）であると言いたい。これは直き知を伴った謙遜な心であり、聖書が語る＜神への焼き尽くす献げ物＞（レビ 5,10）である。これは、人のすべてが聖性へと止揚され、差異なき一致に向けて光に照らされた場合に成立する。2) というのも、自らを虜われの身とし自らを滅却して、＜欲情によって腐敗した旧い人＞（2 コリント 10,5）を滅ぼし、かつての倒錯による死から＜新たに＞蘇った者たちに対し、これは福音と使徒がともども命じていることだからである。その際彼らは、情動を滅し、罪なき者となることが求められる。3) これこそ実に、律法もまた「罪人を取り除け」（申命 13,8 以下）と命じる際に暗示していることであって、それは死から生命への、すなわち信仰による無情動への蘇生ということなのである。4) 律法の教師たちはこのことを理解せず、互いに争いあうために律法を受容し、意味もなく攻撃しようと試みる人々にその糸口を提供した。5) この故にわれわれは、欠けることのない神・すべてのものをすべてに人々に供する方に対して、相応しい形

でのいけにえを果たせずにいる。われわれは、われわれのためにいけにえとなった方を讃える際に、欠けたところのない方から欠けたところのないものに向け、無情動なる方から無情動なるものに向けて、われわれ自身をいけにえとしているのである。

6) 神が喜ぶのは、ただわれわれの救いのみである。われわれは、快樂に打ち勝てなかった人に対していけにえを捧げずとも、至極当然である。もっともこのいけにえとは、低く留まるものであり、広く天空を覆う雲にまで至るものではない。だが実は、この雲よりもはるか遠くにまで及び、煙による蒸散は、先んじる方の許へと先んじて届く。

15.1) かくして神性とは、欠けたこともなければ、快樂・利得・財を愛することもなく、満ち足りていて、すべて成ったもの・欠けたものにすべてのものを提供する存在である。またいけにえや供物、榮譽や敬意によってまじないを懸けられることもなく、それらのいかなるものによっても逸れることがない。むしろ、美にして善である人々が、正義を決して裏切ることがなく、威嚇の破滅のためとか、より大きな贈り物を約束されたとかのために正義を裏切ったりすることの決してない人に似ていると思われる。2) しかるに、人間の靈魂よりも自由なるもの・人生での選択に従うことのないものの存在を見抜くことのできない人々は、粗野な不正のために生じた事件に憤りを表し、神など存在しないと考える。3) 見解の上で彼らに似るのは、快樂を抑制しなかったために、法外な苦悩・不本意な運勢に陥った者どもが、災厄に生きる気を失い、神などいない、あるいはすべてを見そなわす存在などない、と言う人々の場合である。4) 一方次のような人々もいる。それは、彼らの想定する神々とは、いけにえや贈り物によって宥めることが可能であり、いわば彼らの放埒さに助力する存在であるとする人々である。彼らは、変わることなく義なる善性のうちにいる、唯一にして真なる神が存在することを信じようとしなない。

16.1) 実に、覚知者は敬虔なる人である。彼は、まずは自らを注視し、続いて隣人たちを気遣う。それはわれわれが最良の人々となるためである。子は、自らを真摯なる者・父に似た者として父に見せるとき、善き父を喜ばせる。同じことは臣下と君主の関係についても当てはまる。2) 信じ、従うことはわれわれの為すべき業である。しかるにある人は、無知による思慮を欠いた衝動や無学による非理性的な必然こそ、諸悪の根源にして質料の軟弱さに他ならないと推測するだろう。3) 覚知者はそれらに対し、あたかも獣に対するが如くに学びによって凌駕する者となり、神的な選択意志を模倣して、人々のうち力を尽くして望む者たちのことを厚遇するのである。4) そして、

ちょうどモーセがそうであったように、時に権限の座に就くことがあれば、臣下たちの救いについて考えを致し、野卑で頑迷固陋な性質を懐柔することであろう。その方法としては、優れた人々には敬意を払い、悪辣な者どもには懲罰をもって接する。その懲罰とは、御言葉により教導のために明記されている事柄である。5) というのもとりわけ

「神の像は神に似る」(「ギリシア悲劇断片集」, 作者不詳断片 117)

ものであり、義人の靈魂はそれに当たるからである。靈魂のうちには、掟に対する聴従を通じ、すべて死すべき者ども・不死なる者どもの君主が、神聖なる者として奉納され、その座を与えられている。この方は美しき事どもの王であり産み出し手であって、真なる法・規定、そして永遠の御言葉である。そして各々の者どもに対しては個々の、またすべての者どもに対しては共通のあり方において、一なる救い主なのである。

6) この方こそ真に御一人子であり、すべての王であり全能者である父の生き写しであって(ヘブライ1,3)、覚知者に対して自らの像による完全な観想を刻印する。それはすでに、第二原因すなわち真の生命に向けて力の限り似たものとなった、第三の神的な像となるためである。この真の生命を真理の命として、われわれは生きている。その際にわれわれは、覚知者をいわば「型」(typos) となった者として自らに写し取る。この型は、確固たるもの・まったく変化を来たさないものの傍らに、その住まいを定めているものである。

17.1) さて、自身、および自身に関わる事どもの支配者は、神的な知の確固たる把握を獲得し、真理に向かって真摯に歩みを進める。2) 思惟される事どもの覚知また把握は、すべからく確固たる知と呼ばれるであろう。その知は、まずは神的な事どもをめぐる業に関して、その第一原因が何であるのか、またくそれを通じて万物が成ったもの、それなくしては何物も成らなかったもの>(ヨハネ1,3) が何であるのかを洞察することができる。さらには、いったい何が、伸びるもの・囲むものという形で存在するのか、繋がったもの・分かたれたものは何であるのか、あるいはこれらの各々はどのような配列を有し、各々どのような力・どのような次第をもたらすものであるのかを見抜く。3) また人間的な事どもをめぐることは、そもそも人間とはいったい何であるのか、人間にとって、本性に適うこと・本性に反することとはいったい何であるのか、どのように行いまた被るのが適切であるのか、人間の徳とは、また悪徳とは一体どのようなものであるのか、また善・悪・その中間にあるものに関して、さらには勇敢さ・

賢慮・節制,そしてすべてを包括する徳である正義に関わる事どもについて洞察する.

4) もっとも、彼は賢慮と正義については知恵の獲得のために用いるが、勇敢さに関しては、状況に左右される事どもを忍耐することにおいてばかりでなく、快楽や欲情、苦痛や憤怒を克服し、総じて、力をもっていないしある種の迷妄をもってわれわれを誘おうとするものすべてを制するために用いる. 5) というのも悪徳と悪に対しては忍耐することが必要なのではなく、むしろ撃退することが不可欠なのであって、忍耐すべきは恐ろしき事どもに関してである. 苦痛が見つかった場合でも、これは医術・教育・懲罰に関して有益なものとなる. この苦痛を通して、人間の品性が益に向けて正されるからである. 18.1) さて、勇敢さの種類とは、堅忍不拔、寛厚、寛容、自由、そして威厳である. この故に、多くの者からの軽蔑や悪しき評判といったものに覚知者が囚われることはなく、栄誉や追従にも動じることがなく、労苦を忍従することにうちに、適切な事柄を実行するとともに、果敢にもあらゆる状況を超越した者となる. 実に彼は、他者のうちにあつてその存在を顕わにする人間なのである. 2) 彼は、思慮を救いとして靈魂の平穩さのうちに思慮を用い、勧められる善美を、自らに固有のものとして受け入れる. それは恥ずべき事柄を異質なものとして避けんがためである. そして秩序正しく、まさしく秩序に適った者となり、すべてを秩序と規律のうちに言い、何事にも決して過つことなく、何事にも執着しないということにおいて富める者となる. 何事にも事欠かず、善の覚知によって、あらゆる善に満ち溢れているためである. 3) というのも彼における正義の業とはまずもって、同胞とともに暮らすことを愛すること、そして地にあつても天にあつても彼らとともにあるということだからである. 19.1) このようなわけで、獲得した財を分かち与える者は、人間愛に満ちていると同時に、あらゆる悪行を完全に免れているという意味で、悪を憎む者の極みである. 2) 実に、自らにも隣人たちにも信厚く、かつ律法に従順であることを学ぶことが必須である. この人は<神の仕え人> (ヘブライ3,5) であり、喜んで律法に従う. もっとももはや律法のためではなく、覚知そのものによって、彼は<心において淨い者> (マタイ5,8) となっており、この人こそ<神の友> (ヤコブ 2,23) である. 3) というのもわれわれは、本性的に徳を有して生まれてきたわけではないし、徳が、他の身体の部位と同じように、成ったもののうちに本性上後から生じるというものでもないからである (徳はもはや、おのずから成るものでも賞賛の対象でもないであろうから). また生起するものから、あるいは後から成立する、ちょうど方言のような習慣からも、徳が完成される

ということはない（悪徳は、ほとんどこのようなあり方で成立する）。4) かくして覚知は、何かそれを獲得するための術知とか、身体を気遣う術知とかから生起するものでは決してない。だからといって、一般教養から生起するものでもない。というものもし、一般教養だけで靈魂を整えたり、靈魂に資したりすることが可能なのであれば、愛すべきことであろうから。20.1) というのもポリスの法というものは、卑しき行為をもおそらくチェックすることができるが、その論理は説得的であるにしても、表面的であるため、真理の知に関わる継続性を提供できるはずもない。2) しかるにギリシア人の哲学は、靈魂を信仰の受容に向け、いわば前もって浄め、予め慣らすのであり、その靈魂に真理は覚知を据えるのである。

3) この人こそ、このような競技者こそ、真に、巨大な競技場であるこの世において、あらゆる情動にまさって真の勝利の栄冠を受ける人物である。4) というのも競技の主宰者は全能なる神であり、あわせてその審判者は神のひとり子であり、観客は天使たちと神々である。競技様式はフリースタイルかつ全精力を挙げてのものであって、＜血肉を相手にするものではなく＞（エフェソ 6,12）、むしろ肉を通じて＜靈的な権限＞を行使する激しい情動を相手にするものなのである。5) これらの巨大な対抗者に取り囲まれつつ、いわばある種の競技を試みってくる仕掛け人たちと闘いながら、キリストは不死性を勝ち取ったのである。というのも神の判決というものは、最も正しき裁判にあって、欺くことがないからである。6) かくして演舞場たる闘争の場に招き入れられると、競技者たちは競技場にあって全種競技を行う。かくしてこの競技において、打ち破られることのない方によって鍛えられた人物は生き残る。7) というのも神の許では、すべての人にとってすべてが等しく置かれており、神一人非の打ち所のない方であるが、力ある人が選ばれ、意志の強き者が力を発揮するからである。このようにしてわれわれは理性を獲得したが、それはわれわれが、自らのなしたことを知るためであり、この世で「汝自身を知れ」ということを実行し、われわれが何のために成ったのか、それを知るためである。8) しかるにわれわれは、もし救われることを欲するということを選ぶのであれば、掟に従順であるために成ったのである。これこそ応報（*Adrasteia*）なのであり、その故に、神を逃れることはできないのである。

21.1) 実に、人間の業としては、掟を通じて様々なかたちで救いを告げる神への随順（*eupeitheia*）があり、告白としての証し（*homologia*）は神を喜ばせる行為である。2) というのも恩義を授ける存在が、善行を先導するのであり、必要となる推察を通じ、

喜んでこれらの掟を受け入れて守る者は、信篤き者となる。一方力強く愛をもって善行を返す者は、すでに友である。3) 人間の側からの唯一最大の返礼とは、神に喜ばれる事どもを実行することである。4) そして師にして救い主なる方は、いわば自らの後裔、また生まれを同じくする実りとして、人間の側から、益と進捗とを受け取る。それはこの方への感謝と敬意のしるしである。しかしこの方は、自らに信を置く者たちに対する誹謗については、それを自分自身に対する忘恩また不敬と見なす。(神に対して、他にいかなるかたちで関わりうる不敬があるだろうか?) 5) それゆえ、主から受けた益に対し、救いの価値に適う返礼としては、他にこれほど大きなものはあり得ない。6) しかるに、所有物に損害を与える者どもはその所有主をないがしろにするのと同じように、また配下の兵士たちを害う者どもは、その兵士たちを統べる将軍に損害を与えるのと同じように、主に献身している人々への虐待は、主に対して心を留めないことである。7) 太陽は、天と全世界とに光を与え、地と海とを輝かせるばかりでなく、窓や小さな屋根穴を通じて、最も奥まった家々にも光を遣わす。ちょうどそれと同じように、御言葉はありとあらゆる場所に注がれ、人生における行動の最も微細な部分にも目を注いでいるのである。

#### IV. ギリシア人の迷信.

22.1) さて、ギリシア人たちは神々のことを、人間のような姿をしているばかりでなく人間のように情動を被る存在であると仮定する。そして各々の者が、神々の容姿を自分たちに似たものとして描き出す。それはクセノファネスが次のように述べているとおりである。「神々について、エティオピア人は黒色なものに、トラキア人は平鼻かつ赤髪で灰眼なものに想像する」(クセノファネス、断片 16 デイールス)。同様に彼らは、靈魂に関しても神々を自分たちと似たものに作り上げる。すなわち異邦人たちは、その品性において、獣的で野卑なものに、一方ギリシア人たちは、情動を被るという点を除けばより温和なものに想定する。2) それゆえ、卑劣な者たちにあっては、神に関する思念を悪しきかたちで抱くのがいとも必然であるが、真摯な者にあっては最良のものとして描き出す。それゆえ、真に「靈魂において王的な者」(プラトン『フィドス』30D)は、同時に覚知者であり、敬神の念に富み、迷信に囚われない者であるが、彼は唯一なる神について、崇敬に値し、莊嚴で、寛容であり、善行に溢れ、恵みに満ち、あらゆる善の創始者であり、諸悪に対しては唯一無関係な存在であると信じて疑わない。3)



そして思うに、ギリシア人たちの迷信については、わたくしの『プロトレプティコス』（勸告者）と題した論考の中で十分に提示し、その際、急いだ叙述に拠りはしたものの、意を尽くしたと考える（『プロトレプティコス』11-37）. 23.1）したがって「明瞭に語られた事柄を、再度神話めかして述べる」（ホメロス『オデュッセイア』12.453）ことはまったく必要がない。ただこの場に至って、多くの事どものうちからほんのわずかな事だけは明示することが不可欠である。それは、「神を最も邪悪な人々になぞらえる者は無神論者である」ということを示す明証のためにも必要なことである。2）というのも、彼らのために神々が人間たちによって害われる場合、われわれによって神々が、人間たちよりも劣った存在として示されるからである。あるいはたとえ害われるというのでなくとも、さながら怒りっぽい老婆が憤りに駆り立てられるように、どうして神々がそのために苛立たないことがあるだろうか。それはちょうど、アルテミスがオイネウスのためにアイトリア人たちに対して憤ったと言われる場合と同じである（ホメロス『イリアス』9.533-537）。3）つまりどうして、女神である存在が、オイネウスが女神を蔑ろにしたのではなく、あるいは忘れた、またはもう生贄が済んだものとして顧みなかった、などということを知らぬはずがあろうか。4）あるいはまた、かのアウゲは、アテナ女神の神殿のなかで子を産んだということで女神を立腹させたものの、幸いにして次のように述べ、女神から赦されているではないか。

5) 「あなたは、死した人間が戦利品となるのを見て悦び、  
死者たちの遺物にも喜びをなす。ならばこのことも、  
あなたにとって汚らわしきことではあるまい。もしわたしが  
産んだのであれば、それをあなたはあっぱれと思し召すでしょう」

（エクリピデス『アウゲ』断片 266）。

6) こうして、神殿で子を産む他の動物どもも、何ら不正を犯すことにはならないのである。

24.1) かくして、温厚な人々に関しては、迷信深くなるのも不思議はなく、彼らはすべてのしるしが、起こり得べきもの、そして諸々の災いの原因であると考えてるのである。

2) 「もし鼠が泥だらけの壇を掘り、  
袋以外には何もかじる物がなく、  
育てた鶏が西から鳴くなら、

これらは何かの前兆だと解するがよい」(作者不詳喜劇断片, 341).

3) メナンドロスはこのような人物を『迷信家』において喜劇化している.

「おお大いに崇められるべき神々よ,

これがわたしにとって何か良きことになりますように.

わたしは右のスリッパで, 外套を踏んづけて裂いてしまいました.

もちろんそれは, ナンセンスですよ.

わたしが不注意だったのです. でもあなたはケチで, 新しいのを

買うことを望まないのですから」(メナンドロス『迷信家』断片 109).

4) アンティフォンの逸話は面白い. ある人が神託を問い, 雌豚が子豚を食べたという回答を得た. 彼は雌豚が飼育者の狭隘さのために餓えて弱ったのを見たのである. これに対してアンティフォンは言った. 「このしるしを喜べ. こんなに餓えても, この豚はあなたの子を食べることはしなかったのだから」(テュルリス『ソクラテス以前の哲学者たち, 552.41).

5) ビオンは言っている. 「もし鼠が, 何を食べているのか知らずに袋を食べ尽くしてしまったところで, 何の驚くべきことがあるのか. アルケシラオスが冗談で試みたように, もし袋が鼠を食い尽くしたとすれば, それこそ驚くべきことだが」(ビオン・ボリュステス, 断片 45).

25.1) 実に, ディオゲネスもまた, ヘビがすりこ木にからみ付いているのを見て驚く者に対し, 的確にも次のように述べている. 「驚くな. もっと驚くべきなのは, すりこ木が真直ぐなヘビに取り付いているのを目にした場合だ」(ディオゲネス, 断片 282).

2) 動物の中でも理性を持たないものどもも, 駆けたり走ったり, 闘ったり子を産んだり死んだりするのは必然である. 彼らにとって本性に適っている事柄は, われわれにとっても本性に相反する事柄ではない.

3) 「多くの鳥たちは, 日の光の下で

徘徊している」(ホメロス『オデュッセイア』 2.181 以下).

4) 一方喜劇作家のフィレモンは, 次のような形で喜劇化している.

「彼は言う, 誰がくしゃみをするのか, 誰が喋るのかを注意深く

観察している人, あるいは誰が先に歩み出るかを

見守っている人をわたしが見れば, わたしはすぐにその人を

アゴラで売り飛ばす. われわれの誰もが皆, この人に

歩み寄り、話しかけ、くしゃみをする。

ただその町にいる人々に対して、そんなことはしない。

問題は、その本性に従ってあり、そのとおりに生じるのだ」

(フィルモン、断片 100)。

5) だからしらふでいる人々は健康を求め、食べ過ぎの人、酩酊に取り付かれた者は、祝祭の日に病を引き寄せることになるのである。

26.1) しかるに多くの人々は、

「奉納された書物をも恐れる」(ディオゲネス、断片 21)。

ディオゲネスは、ある邪悪な人の家に、

「勝利の栄光を帯びたヘラクレスが

この家には住んでいる。災いは決して入ってはならない」

と記されているのを見出し、「ではこの家の主人は、どのようにしてこの家に入るのだろうか」と言ったというが、これはまったく機知に富んでいる。

2) 実にこれらの人々は、すべての樹木、あるいは輝くと言われている一切の石に額づく。そして赤い羊毛や荒塩のひとかけら、松明の炎や硫黄を恐れる。そして伏魔師によって、何か不浄な浄めの式によってまじないを駆けてもらう。しかるに神、真なる神は、義なる人の品性だけを聖なるものとして認め、逆に不正で邪悪な性格を呪われたものとする。3) ちょうど、卵を温めると、浄められたものの中から孵化するのが見られるのと同様である。もし浄らかなものに何か悪が取り付いていれば、そのようなことは起こらないのである。

4) 実に、喜劇作家のディフィロスは伏魔師のことを次のような詩句で巧みに喜劇化している。

「彼はプロイトスの娘たちと、彼女たちの父親である

アバンティオスのプロイトス、そして五番目には老婆を浄める。

このような言葉と一つの松明、一匹のシャコでもって。

これだけの人々の体を照らし、

神的なアスファルトとうなりを挙げる海に浸して。

その海とは波も麗しき深き流れのオケアノスの一部。

だが幸いなるアエルよ、雲間よりアンティキュラを遣わしたまえ、

わたしがこのようなナンキンムシから雄蜂を生み出せるように」

(デフィロス, 断片 126).

27.1) メナンドロスもまた、巧みに劇化している.

「フェイディアスよ, もしお前が何か真に悪しきものを持っているとすれば,  
あなたはそのために真の薬草を求めねばなるまい.  
だがいま, あなたは持っていない. 虚しきものに対しては,  
虚しき薬草を見つけるがよい. きっと何かお前のために役立ってくれると  
思ったまえ. 女たちにぐるりと吹き清めてもらい, ぐるりと見回して  
もらうがよい. 三つの泉から水を取り, 塩と豆を投じて振り撒かせよ」

(メナンドロス, 断片 530).

2) 自らのうちに悪の意識がない者は全身が淨いのである.

3) 一方悲劇は次のように述べている.

「オレステスよ, どんな病がお前を破滅させたのか.

恐ろしき行為をしたと判った, その良心だ」(エウリピデス『オレステス』395 以下).

4) というのも浄らかさとは真に, 罪からの隔絶ということ以外の何ものでもあり得ないからである.

5) エピカルモスも次のように巧みに述べている.

「あなたが全身において浄らかであれば, あなたの心も淨いのだ」

(エピカルモス, 断片 269).

6) すなわちわれわれは, 靈魂をも, 悪しく邪な教説から, 真っ直ぐな御言葉によって浄め尽くすことが不可欠だと主張したい. そしてその際に, 先立つ主要点の想起へと向かうべきである. なぜなら, 神秘の伝授に先立って, 秘儀を受けようとする者どもには, ある種の浄めに近づくことが相応しいのであり, それはちょうど, 無神論的な思いを棄て去り, 真なる伝授へと向かうことが不可欠なのと同様だからである.

## V. 神に相応しい神殿あるいは彫像があるのか.

28.1) 一体全体, われわれは, 把握し尽すことのできない方をどこかある場所に限定したり, <手で作った> (使徒行録 17,24) 神殿のうちに, 万物を内包する方を閉じ込めたりすることで, 何か麗しく真なることを行っていると言えるのだろうか. 2) では家造りや彫刻家, あるいは手工業者の術のうちに, 何か聖なる業があるのだろうか. むしろ彼らよりも, この大気, 周囲をこうして覆えるもの, あるいはさらに全世界,

このすべてを、神の卓越性に適わしきものとする人々のほうが優れているのではないだろうか。3) 哲学者たち自身が言っているように、もし人間すなわち「神の玩具」(プラトン『法律』889CDE)であるものが、神を形作り、神を術の慰み物とするのであれば、それこそ笑止千万なことであろう。成ったものというのは、それがそこから生成したものに同じくまた似たものである。それはたとえば、象からできた象牙、黄金から作られた金貨などに関して言えることである。4) しかるに人間のうち手工業者たちによって形成された彫像や聖像は、生の素材から成ったものであり、したがってそれら自体が生で、質料に過ぎず、大地に帰るものである。術を究めれば、手工業の術は修め尽くすことができよう。しかしだからといってその術知の業が聖なるもの・神聖なものとなることはない。5) すべてがその場所にあるとすれば、何物も据えられていないことがないのであるから、どうして改めてそこに据える必要があるのだろうか。実に、据えられる物というのは、それまでそこに据えられていなかったために、誰かによってそこに据えられるのである。6) であるから、もし神が人間によって据えられるのであれば、それまで神は据えられていなかったのであり、そもそもまったく存在していなかったということになる。7) なぜなら存在していない物は、据えられていなかったということになるからである。すると、すべて存在していなかったものがそこに据えられることになる。だが存在そのものである方(出エジプト3,14)は、非存在である人間によって据えられることはあり得ず、また他の存在者によって据えられることもあり得ない。その存在もまた存在であるはずだからである。残る可能性としては、自分自身で据えられるということのみである。29.1) だがどうして、ある者が何か自ら自身を生むということがありえようか。あるいはいかにして、存在そのものである方が、自らを存在に向けて据えるというのであろうか。あるいはそれ以前は据えられていなかった存在者が、自らを据えるということなのだろうか。だがそのようなことは決してあり得ない。なぜなら非存在なるものは据えられていないのであるから。あるいはそれに先立って存在性を有していたものが、後に自ら自身を形成したからと言って、どうして据えられたと考えられるだろうか。2) また存在物がすべて自身のものである方にとって、どうして何かを必要とするということがありうるだろうか。だがもし神が人間の姿をしているとすれば、その方は人間と等しいものを必要とするであろう。すなわちそれは、食物、固有の家屋、それに伴うもの等すべてである。同じ姿をしている者、同じことを被る者は、同様の生活様式を必要とするからである。3)

だがもし聖域というものが異なったあり方に受け取られ、神その方自身と、神の崇敬のための設備ということであるとしよう。そうすれば、神に対する崇敬のために、聖なる認識 (epignōsis) を通じて成った教会のことを、どうして勝義的に、神の聖なる場であると言えないことがあろうか。その場とは、多くの事どもに値し、手工業者の術によって作られたものでも、また放浪者の手ででっち上げられたものでもなく、神の意向によって神殿として建造されたものであるのだから。4) いまやわれわれは、教会のことを場所ではなく、選ばれた者たちの集いであると呼ぶことにしよう。この神殿は、神に適った偉大さを受け取る上でより優れた神殿なのである。というのも多くに値する動物は、万物に値する方に、否むしろ何物にも換えがたい方に、聖性の溢れをもって奉献されるのであるから。5) この覚知者は、多くに値し神にあって貴い者であり、その人のうちには神が据えられている、つまり神をめぐる覚知が奉献されている。6) そこにわれわれは神の似姿を見出すことができるだろう。すなわちそれは、義なる靈魂における神性と、聖なる像とである。もしこの靈魂が幸いなるものであるならば、それはすでに浄められたものとなっているのであるから、幸いなる業を成就することであろう。7) ここには、据えるものと据えられるもの、すでに覚知者となった存在と、たとえまだ神の知を受け取るに値するに至っていないなくとも、これから覚知者となりうる存在がある。8) なぜならすべて、これから信じようとする存在は、すでに神にあって信篤き存在であり、崇敬の念に向けて据えられ徳に満ちた像なのであって、それは神に捧げられたものなのであるから。

## VI. 神に受け入れられる犠牲.

30.1) さて神は、場所に限定されることもなければ、動物の姿に似せられるものでもない。ちょうどそれと同じように神は、人間と同じような情動を持つものでも、あるいは生み出されたものと同じように、飢餓のために食物としての献げ物を欲しこれを必要とするものでもない。3) 情動が関わる事物はすべて、朽ち果てるものであり、また發育することのない存在に食物を運ぶのは虚しいことである。3) 実に、かの喜劇作家フェレクラテスは『脱走者たち』の中で、神々自身が、神官たちから成る人間どもから痛罵されるさまを巧みに描き出している。

「あなた方が神々に生贄を献げるとき、まずもって祭司たちに、  
考えていることを伝えなさい。それからあなた方は、

(言うのも恥ずかしいことだが)

十分に両腿を、鼠径部まですべての肉と、まさしく尻の部分まで、よく注意して剥ぎなさい。それから脊椎骨はまるでヤスリにかけるようにし、犬に分けてやるようにしてわれわれに分けなさい。それから互いに羞恥の心をもって、多くの捧げもののうちに隠しなさい」(フェクラテス『脱走者たち』断片 23)。

4) 一方、こちらにもまた喜劇作家であるエウブロス、およそ次のような文言でもって、生贄に関して記している。

「神々のためには、しっぽと腿肉だけを、  
あたかも少年愛好者に対するように、捧げなさい」。

5) さらに彼は、作品『セメレ』の中にディオニュソスを登場させ、次のような台詞を言わせている。

「誰かがわたしに生贄を捧げる際には、まずもって、  
血、膀胱、肝臓、心臓、  
大網膜の表面を捧げなさい。わたしは甘い部分も、大腿骨も  
食べないのだから」(エウブロス『セメレ』断片 95)。

31.1) 一方メナンドロスも、次のような詩句を作っている。

「腰の極み、  
それに胆汁、食べられない骨は神々に捧げ、  
彼ら自身は他の部分を食す」(メナンドロス『気難し屋』断片 129.5-7)。

2) 一体全体、焼き尽くす生贄の香は、獣どものためにも回避されるべきではないだろうか。もし本当に、立ち上る香というものがギリシア人たちの神々からの贈り物であるとすれば(ホロス『イリアス』4.49)、彼らは屠殺者たちのことを先に神格化すべきではないだろうか。屠殺者たちは同じ幸いに値するのだから。また香炉そのものに先ず額づくべきではないだろうか。香炉は、高貴極まりない香に、より密着しているのだから。3) ヘシオドスもまた、肉の分割に際してゼウスがプロメテウスによって欺かれ、「欺きに満ちた姦策により、牛の白き骨」が「輝く脂身」に隠されているほうを選び取ったと言う(ヘシオドス『神統記』540 以下)。

「この時から地上では、人間の族が神々のために、  
芳香を放つ祭壇の上で、白い骨を燃やすようになった」

(ヘシオドス『神統記』556以下).

4) しかしながらどこにも、貧しさゆえの欲情によって、悪しきものとされた神をいつくしむべきだとは言われていない。したがって彼らは、冬眠する獣たちによっても欲情なくいつくしまれるものとして、神を植物にも似た存在にするのであろう。5) 実に、これらの香は、大気の厚みのためであろうか、はたまた自分自身の身体からの蒸散物によってであろうか、育まれて、害を伴わずに増大すると言われている。6) もし神性が、それらによって十全に慈しまれるとして、欠けることのない方にとって一体いかなる滋養物が必要だというのだろうか。7) もし神が崇敬されることを喜ぶとして、その方は本性的に欠けることのない方なのだから、われわれが祈りをもって神を崇敬することはまったく適切なことなのではないだろうか。それどころかこうしてわれわれが義をもって捧げる生贄こそ、最良にして最も聖なる献納物なのである。その際にわれわれは最も義しきロゴスをもって褒め称え、そのロゴスを通じて覚知を獲得し、学び知った方に対し、このロゴスを通して栄光を帰すのであるから。8) 実に、われわれの許なる祭壇とは、この世にあって、祈りによって捧げられる事どもの地上における集成なのである。それはいわば、共通にして一なる思いを一なる声とするものなのである。

9) さて、臭覚による滋養物が、口を通してのものよりも神的であるとすれば、それに限らず息吹のあり方をも明らかにするものである。32.1) では彼らは、神についてはどう述べるだろうか。諸霊たちの一種のように、息をしているというのだろうか。それとも水中生物のように、分岐したヒレによって息を吸い込むだけだというのだろうか。あるいは昆虫のように、羽根によって裂け目を打ち合わせることで、呼吸をしているというのだろうか。2) だが十全に思考を尽くす人であれば、神をこれらの何物にもなぞらえ合わせはすまい。呼吸をするものはすべて、肺の胴体への膨張によって大気を引き寄せる。3) しかる後、もしそれらのものがはらわた・動脈・血管・神経・あるいは四肢を神に捧げるならば、それらのうちにはいかなる相違点ももたらされないであろう。4) しかるに教会 (ekklesiā) に関しては、「息吹の協調性」(sympnoia) が力説される。というのも教会の献げものとは、聖なる靈魂から蒸散するロゴス・御言葉であり、献げ物とあいまってその思いのすべてが神の許に明らかにされるからである。5) しかるに最も古い祭壇は、デロス島にある浄らかなものだとしばしば語られてきた (ディオゲネス・ラエティアス『ギリシア哲学者列伝』8.13)。この祭壇にはただピュタゴラ



スだけが、殺人や死によって穢されていないという理由で近づくことができたと言われている。だが真に聖なる祭壇とは義なる靈魂であり、その靈魂から立ち昇る芳香とは敬虔なる祈りである、と彼らがわれわれに言うとするば、われわれは信じないことがあるか。6) しかるにわたくしが思うに、生贄とは、肉を食らうために人間によって発案されたものであろう。だがそのような偶像崇拜をせずとも、他の仕方で、望む者は肉に与ることができたのである。7) まず律法によれば、生贄とはわれわれの側からの敬虔さを比喩的に表現したものである。それはちょうど、罪の償いのために奉納されるキジバトや鳩が、靈魂の中で理性に与かっていない部分の浄めとして神に受け入れられるものであると述べられているとおりである(レビ 12,6)。8) しかしながら、誰かある義人が、肉食によって靈魂に重荷を懸けることをしないとすれば、それはある種の善き論拠に拠るものであり、ピュタゴラスや彼の一派の者たちが、靈魂の輪廻を夢見ているのとは異なる理由による。9) だがクセノクラテスは『動物からの滋養物について』で、またポレモンは『本性に基づいた生について』という論考の中で個別に問いつつ明確に述べているように思われることには、肉による滋養物は不適切であり、それは消化されてしまうと、非理性的な動物の靈魂に同化させる力を持つと言われている。

33.1) ユダヤ人たちが豚肉を避けるのは、とりわけこの理由によるものである。彼らはこの動物を、まるで汚らわしいものでもあるかのように忌避するが、それはとりわけ豚が、他のものの実りを掘り起こしては台なしにしてしまうからである。しかるに彼らがもし、動物たちが人間に捧げられていると言うのであれば、われわれもそれに同意する。ただし食用に関しては必ずしも完全にそうなのではなく、またすべてがそうなのでもなくて、悪しき働きをしないものに限られる。2) それゆえ喜劇作家のプラトンが、戯曲『祝祭』において次のように述べているのは理に適っている。

「四つ足動物に関しては、われわれは今後、  
そのいかなるものも殺傷してはならない。  
ただ豚だけは例外である。豚の肉は極めて美味であり、  
豚からは毛皮と、泥と、声以外には何も生じないから」

(プラトン『祝祭』断片 28)。

3) ここからアイソポスも、豚は引かれて行くとき、最も大きな叫び声を挙げると言っているが(アイリアス『ギリシア奇談集』10.5)、これは間違っていない。なぜなら豚は、自

らが生贄に捧げられる以外には何の益にもならないということを、よく自覚しているからである。それゆえクレアンテスも、豚どもは塩の代わりに靈魂を有していると述べている。つまり、それは肉が腐らないようにするためだというのである（クレアンテス、断片 44）。4) かくしてある人々は豚を無益なものとして食すが、またある人々は実りを損なうものとして食さず、また他の人々はこの動物が交合のためにはマイナスであるとして食さない。これと同じ理由から律法は、雄ヤギに関しても、諸々の災いを浄める目的の場合を除いては生贄に供さない（レビ 16,10）。なぜなら快樂とは諸悪の母体だからである。ここから彼らは、欲情の抑制のために雄ヤギの肉を食用に供するとも言われている。5) また豚の肉はそのほとんどが消化されて肉化すると言われている。それゆえ身体を鍛錬する人々にとっては有用であるが、靈魂そのものを高めるべく精進している人々にとっては、豚肉の摂取により生じる弛緩のためにまったく益がないという。6) おそらく覚知者なら、修練の目的で肉食を断ち、生殖器官あたりの肉がはちきれんばかりになることを控えることであろう。7) というのもアンドロキュデスはこう言っている。「酒の飲みすぎ・肉の食べすぎは、身体を強壯にはするものの、靈魂に関してはより鈍重にする」（プルタルコス『倫理論集』472B）。そのような滋養物は精密な知解のためには無用である。8) それゆえエジプト人たちも、祭司たちに対し、彼らが儀礼の勤めにある間は肉を食すことを認めていないし、鳥の肉も空虚であるとして摂ることをせず、また魚にも触れることをしない。これには諸説あるものの、特にある説によれば、そのような動物を食すことは、肉を締りのないものにするからだというのである。34.1) 言うまでもなく、陸地に棲む動物や空を飛ぶ鳥は、われわれの靈魂と同じ大気を吸って育まれているわけで、大気と生まれを同じくする靈魂を獲得している。しかるに彼らによれば、魚たちはこの大気を呼吸しているのではなく、むしろ最初の誕生の時点から直ちに、水に混じった大気を吸っているのだと言う。そのあり方はちょうど、それ以外の要素と同様であり、これは質料的な継続のしるしでもあるとされる。

2) というわけで、＜神には高価な生贄をではなく、神に愛される献げ物を献納すべきである＞（ポリュフェリウス『節制について』2.19）。そしてそこから立ち昇る香は、律法に含まれるとともに、幾多の言葉・声から発せられ祈りにおいて調合されたものであるべきである。もっともむしろ、多様な民族と自然本性に発し、律法にならった賜物によって＜一つの信仰＞（エフェソ 4,13）へと整えられ、讃美のうちに捧げられるもので

あるべきだと言えよう。それは浄らかな思いと、正しく直き生活様式とを通して、敬虔な業と正しき祈りに発するものである。3) したがって、詩的な優美さによれば、

「人間のうちで、誰かそれほど愚かにも  
安易に信じ込むような者があるだろうか、  
肉のついていない骨や胆汁を燃やし、神々に  
期待を寄せるなどという者が。そんな献げ物は餓えた犬の  
食物にもならぬし、それで神々が万人を喜ばせ、賜物を獲得し、  
業の為し手たちに恵みを垂れようはずもないだろう」

(「ギリシア悲劇断片集」、作者不詳断片 118)。

たとえそれが、たまたま海賊であれ、追いはぎであれ、僭主であろうとも。4) むしろわれわれは、火が浄めるのは肉ではなく、罪深い靈魂だと言う。その際われわれは、火とはすべてを食い尽くす職人的なものではなく、むしろ賢慮とは、＜火を通り過ぎる靈魂を通して跡づけられる＞（イザヤ43,2）ものだと語るのである。

## VII. 祈りについて。

35.1) われわれは、かのロゴス、救い主その方であり導き手であると信じている方を、さらにその方を通して父を、崇敬し敬愛せねばならないと命じられている。しかも、われわれ以外のある者たちのように、特に定められた日に、というのではなく、全生涯を通して休むことなく、またあらゆるあり方をもってこれを行うべきであると教えられている。2) もちろん＜選ばれた種族＞（詩篇 118,164）は、＜日に七度、あなたを讃える＞（詩篇 118,172）と聖書は述べる。この民は、律法によって義とされた者である。3) したがって覚知者は、定められた場所でも、特別な聖なる場所でもなく、また何らかの祝祭日や、特別に指示された日にではなく、むしろ全生涯をかけ、すべての場所で祈る。たとえ、たまたま自分ただ一人だけの場合であれ、あるいはだれか同じ信を抱く人々を有している場合であれ変わることなく、彼は神を讃える。それはすなわち、覚知という恵み、そしてそれに適う生き方の恵みを明らかにし、感謝を捧げることである。4) だがもし誰か、慎ましさと羞恥のために善き人が現れ、止むことなくこの出会った人をより優れたあり方へと形成する場合であっても、覚知と生活、感謝を通じて常に止むことなく神とともにあるならば、業・言葉・気質のすべてにわたり、この人が刻一刻と自らよりも優れたあり方となってゆくのが何故不合理な

ことであろうか. 5) そのような人は、どんな場所にであれ、神がそこに臨在するのだということを確信していて、神がどこか限られた場所に閉じ込められているなどとは毛頭思わない。その結果彼は、たとえそのような神域なくしても、昼夜を問わず放縦に陥ることはありえない。6) かくしてわれわれは、全生涯を通して祝祭を執り行い、すべてにおいてすべての場に神が現前すると確信しつつ、讃美をもって農耕に励み、讃歌とともに航海し、他の都市での生き方にも巧みに対処するのである。7) しかるに覚知者は、真摯であることによってより一層熱心に神と親しくあるように努めるが、その際すべての人に対して喜びをもって接し、神性に対する注意深さを通じて威厳を保ち、神がわれわれに賜った諸々の人間的な恵みを思い起こすことによって快活である。

36.1) さて、覚知の最たるものについては、預言者が次のように提示しているように思われる。＜高貴さと教養、それに覚知をわたくしに教えたまえ＞（詩篇 118,66）。これは完徳の主要点を漸昇法（*epanabasis*）によって増し加えている箇所である。2) 実に、このような人物こそ真に王的な人間であって、この人こそ敬虔なる神の祭司であり、このようなあり方こそ、古今変わらず異邦人たちのなかで最も理性ある人々が、祭司に相応しき種族として王職へと挙げられる品格とされる次第なのである。3) したがってこのような人物は、劇場の女主人たる民衆支配（*ochlokrasia*）には決して自らを委ねることをせず、語ること・為すこと・見ることのすべてを、卑しい快樂のために夢にも認めることがない。よって彼は、このような観劇の悦楽も、他の楽しみによる様々な快樂をも否定する。それはたとえば、臭覚を魅惑する多種多様な香物、食物のつまみ食い、味覚を胃に懸けるさまざまな鳥の試食、感覚を通じて靈魂を弛緩させる多彩にして芳香なる織物といった類である。4) むしろ彼は、何事を享受する際にも、すべて崇高なかたちで神に向けて奉獻し、食物・飲物・塗り物の一部を必ず万物の与え主のために割き、その賜物の故に、またその享受に際し、自らに与えられた御言葉を通じて感謝を捧げる。酒宴の饗応に応えることは稀であり、友情に満ちた同考の者によるものだと判明していて、饗宴に出向くよう促される機会だけに限られる。5) 彼は、神がすべてを知りすべてを感じ取っていて、それは声に出す事柄に限られることなく、思いの域にまで及ぶということを知悉している。なぜならわれわれのうちにある聴覚は、身体的な行程を通じて機能するものであり、身体的な能力を通してではなく、むしろ何がしか靈魂面での感覚と、何かを意味する声を判別する思惟を通じて予

握を行うからである。

37.1) すなわち神が人間の姿を摂ったのは、聞き届けるためなのではない。また神は感覚を必要とはしない（ストア派は神が感覚を必要とするという考え方を採る）。そして神は、とりわけ聴覚と視覚を必要とするというわけではない。それ以外の仕方では、神はまったく予握しえないから、という理由は成り立たないのである。2) むしろ、大気の共情性や天使たちのいとも鋭き共通感覚、さらにはまた良心に触れる靈魂の力が、一種語りえぬ力をもって、また感覚面での聴覚を通すことなく、想念とともにすべてを認識するのである。3) そしてたとえある人が、声というものは地上に低く、大気のあたりを徘徊するものであるから神には届き得ないと主張しようとも、聖なる者たちの想念は大気ばかりでなく、全世界をも切り裂き貫くのである。4) しかるに神の力は、光と同じように、靈魂のすべてを見透す。ではどうだろうか。選択意志 (*proairesis*) もまた、自らの声を先んじて神の許に届かせるのではないだろうか。5) したがってこの選択意志は、良心によっても運ばれるのではないだろうか。ではいったい、意図的に選び抜いた人を知悉し、誕生の前から、起こるべき事柄をすでにあるものとして認識している方が、どうして何か声を待ちもうけているということがあり得ようか。6) あるいはまた、どうしてその力の光が、靈魂全体の深みをいたるところまで照らし出すことがないだろうか。聖書が述べているように、この力の＜灯は、腹のすみずみまで究める＞（箴言 20,21LXX）と言われているのではないか。なぜなら神とは、そのすべてが聴覚であり、そのすべてが眼であるがゆえに、人はこのような類の名詞を用いることができるのだから。

38.1) かくして、神に関して適切でない仮説は、讃歌にあっても語りにあっても、書面においても教説においても、総じていかなる敬神の念をも包摂することがない。むしろ卑しく見苦しい想念と思い込みへと向かうだけである。それゆえ、多くの者どもの婉曲な言い回しは、真理に関する無知によるものであり、侮蔑的表現と何ら異なることの無いものである。2) かくして彼らの欲求は彼らの欲情でもあり、総じて彼らの衝動でもあって、その祈りはその同じ彼らのものということになるのである。それゆえ、ちょうど誰一人、飲み物を飲みたいのでなければ飲み物を欲求しないのと同様、嗣業に関しても、それを受け継ぎたいというのでなければ望むことはない。まったく同じように、覚知したいというのでなければ覚知を望むこともないのである。なぜなら良く生きるためでなければ、正しい生活のあり方を望むこともないからである。3)

つまり彼らの祈りは彼らの懇願でもあり、彼らの懇願は彼らの欲情でもある。しかるに祈ることそして欲求することは、必然的に善き事どもを有し、またその獲得に付随する諸々の益を有することへと向かう。4) したがって覚知者は祈りを、靈魂をめぐる真なる諸々の善に対する希求として執り行う。そして祈ると同時に、自らも善性の習慣へと至るように協働する。それはもはや、諸々の善を何か付随的な学びとして有するのではなく、むしろ真に善き存在でありたいと願うことである。39.1) それゆえこれらの人々は、神性というものを知ることが必須であり、この神性に適う徳を有した上で祈ることがとりわけ必要である。その人々こそは、真の善とはいかなるものであるのか、何を求めるべきであるのか、何時どのようにその各々を求めるべきかを知悉する人々である。2) しかるに無学の極みとは、神ならざる存在を神としてこれに願い求めること、あるいは不適當な事柄を願い求めることであり、それは善き事どもを幻に描き、逆に自らにとって悪しき事どもを願うことだからである。3) そこから当然、善き神は唯一なる存在であり、ただこの方だけから、諸々の善のうちあるものが与えられ、あるものが留まるようにとわれわれも天使たちも祈る。だがその祈り方は同じではない。4) 賜物が留まるように願い求めるのと、その端緒を手にするべく尽力するのは、同一でないからである。また諸々の悪が回避されるようにというのも祈りの一種である。5) しかしながら、＜自暴自棄になった人々＞（エフェソ 4,19）のために、覚知者が正義の到来を画して願いを捧げるという場合を除き、人々に対して害が加えられるようにと行われるような祈りは、決してあってはならない。6) したがって、より大胆な言い方をするならば、祈りとは神に対する語りかけなのである。われわれは、囁くような場合、たとえ唇を開くことなく、沈黙のうちに語らおうとも、われわれは内心で叫んでいるのである。神は内面的な語りに、休むことなく耳を傾けているのであるから。

40.1) かくしてわれわれは、頭を挙げ、両手を天に向けて広げ、祈りの最後の唱和の際には両足で身を起こし、思惟される実体に向け靈の望みに従う。そして言葉でもって大地から肉体を引き上げようと試み、より優れたものへの希求により、「翼のついた靈魂」（cf. プラトン『ファイドロス』246BC）を宙に漂わせたならば、「聖所」に向けて赴くことを自らに課し、肉の桎梏を輕蔑するように努める。なぜならわれわれは「覚知者」が、ちょうどエジプトをユダヤ人が意に留めなかったのと同様に、この世のすべてを自発的に逃れるということを知っているからである。これは何にも増して明瞭に、彼

が可能な限り神に近い者たらんとすることを示している。さらにまた、たとえば三時、六時、九時というように定められた時刻を祈りのために割く人々がいるとしても、かの覚知者は、実に生のすべてにわたって祈り、祈りを通して神とともにあろうと努める。つまり要するに、この世で為される事柄にとって有益でないものだけがすべて後に残されることになる。それはあたかも、この世においてすでに、愛によって為される事柄を完遂してしまったかのような状況である。4) だがそればかりでなく、聖なる住まいの幸いなる三位を認識している者たちは（『ストマテイス』 6.14.114.3）、時間を3つに分割する方法、そして等しく祈りでそれらの時間を聖化するあり方を知っている。

41.1) さて、ここに至ってわたくしは、ある異端者たちにより、祈る必要はないとされていることに思いを致す。すなわちこれはプロディコス一派の人々が提起している問題である。2) 彼らが、この無神論的な知恵に関して、それが自分とは無縁な異端者の説だとして思い上がることのないように、この説は以前に、キュレネ派と呼ばれる哲学者たちによって取り上げられたものだということを学ぶがよい。3) おそらく彼ら名を偽った者たちの不敬な「覚知」に関しては、時機を得て反駁が行われるであろう。いまここでは、論評を交えることはせず、彼らに対する攻撃が長きに及び、手がけている論述を中断することのないようにしたい。いまわれわれはただ、真に敬虔にして敬神の念に満ちているのは、真に教会の規準に則って覚知者である存在だけであり、この人物だけには、神の意向に適ったかたちでの願いが、その望み・その願いに対して叶えられるということのみを明らかにしておく。4) というのも神には、自らの望む事柄、それがすべて可能である。ちょうどそれと同じように、覚知者は＜願うことをすべて＞＜受け取る＞（マタイ 21,22）。5) 神は総じて、諸々の善に適う人々とそうでない人々を知悉しているからである。そこから神は、各々の者に相応しい恵みを与える。かくしてしばしば、相応しくない者どもが願っても与えられない。与えられるのは言うまでもなく、それに適っている人々に対してである。6) 願いとは決して引きずり寄せることではない。それは、たとえ要求なくして諸々の善き事どもが与えられる場合であっても変わらない。かくして覚知者の業とは、感謝と、隣人たちが回心に向かうようにとの願いということになる。7) 主も祈ったのとちょうど同じように、覚知者はまず、奉仕の業を果たし終えた事柄に関して感謝を捧げ、認識のうちにある人々ができるだけ多数に上るようにと祈る。それは、救われた人々のうちにあつて、その救いの故に認識を通じて神に栄光が帰されるためである。そして唯一善き方、唯

一なる救い主が、子を通じて世々としえに認識されるためである。8) もっとも、信仰もまた、覚知者的に秘められた祈りの形を取るであろう。42.1) だがもし、祈りが神に対する語らいの始まりとなるとすれば、神に対する近づきに際していかなる場合にも、その始まりをも省略してはならないことになる。2) 言うまでもなく、覚知者の敬虔さは幸いなる賢慮に織り込まれており、自ずからなる完全な告白によって、神の慈しみを明らかにする。3) というのも覚知者の敬虔さは、いわば先慮に対する反旋回歌 (antepistrophē) であり、神の友による応答としての好意の表明だからである。4) 神が善き方であるのは、まったくその意に反してのものではなく、そのあり方はちょうど、火が温める性質を有するのと同様である (神にあって、善き事どもを分かち与えるのは、たとえ事前に祈りを受け取ったにしても、自ずからなる行為である)。また、救われる人が救われるであろうことは、決して神の意に反することではない。なぜなら神は生命を欠いた存在ではなく、すべてに優り、進んでまた選択意志的に救いのために尽力する方だからである。5) それゆえ人間が掟を受けたのは、選択するにせよ回避するにせよ、どちらの方向にであれ人の望む方へと、いわば神から後押しを受けてのことであった。6) 神がやむを得ずに善行を為すということは決してあり得ない。自ら回心する人々に対し、選択意志に従って好意を示すのである。7) というのも神の先慮というものは、われわれに対し、神の許から、いわば下位の者から力に優る者に向けて進み行くような、奉仕するあり方で到来するものではない。むしろ先慮に接しての経綸は、われわれの弱さに対する憐れみによって働きを為すものである。それはちょうど、羊の群れに対する牧者の先慮、あるいは臣民に対する王の先慮と同様のものである。そしてわれわれは、神から委ねられたあり方に従い、秩序だった形で統べる指導者たちに対し、恭順を示すのである。8) 実に、自由人に最も相応しくかつ最も王的な奉仕を提供する人々は、仕え人また神の従僕なのであり、それは敬神の念に満ちた想いと覚知を通じて行われるものである。

43.1) さて、そこにおいてわれわれが神の想念を得ることができるよう場所、そして時間はすべて聖である。善き意志を有し感謝の念に満ちた人物が、祈りを通して願い求める際には必ず、その達成のために何がしかの力が協働し、彼は祈った事柄を通じ、喜んで望みのものを手に入れる。2) というのも諸々の善き事どもをわれわれに与える与え主は、われわれから率直さを勝ち取ろうとするが、その際、すべて善きものは一体となって、その把握に伴うからである。言うまでもなくその次第に関して



は、相応しさに加えてどのようなあり方がよいのか、祈りを通じて吟味が為される。3) もし想念を助けるために声とか言辞がわれわれに与えられているのだとすれば、どうして神が、靈魂そのもの・知性そのものに耳傾けないことがあるだろうか。そこはすでに、靈魂が靈魂に、知性が知性に耳傾ける場所なのであるから。4) そこから神は、多彩な言葉を待つことはしない。それは人間界の通訳者たちと異なる点である。むしろただ一度ですべての人々の想念を判別し、われわれの声が何を表しているのかを理解する。それは、われわれの想いが神に向かって語りかけている事柄であり、その想いとは創造の以前から、想念に上るであろうということを神が知悉しているものなのである。5) したがって声に祈りを添わせるということは不可能であり、ただ内なる霊的なもののすべてを、恣意的な声へと引き伸ばすだけであって、その際には神に向かう妨げのない回心だけが必要とされるのである。

7) 東とは、誕生の日の似像であり、東から光は、まず<闇から輝き出でるもの> (2 コリント 4,6) として指し初める。だがそればかりではなく、無知のうちにのた打ち回る人々にとって、真理の覚知の一日は、太陽のロゴスとして昇り来る。その祈りは、明け方の東に向けて行われる。7) それゆえ神殿のうち最も古くに遡るものは西側を向いているが、それは人々が神像の顔に面して立つ際に、東に顔を向けるように教えられたためである。8) 詩篇は<わが祈りが、あなたの前に香の如くに立ち上るように。わが両手を差し上げる様が、夕べの生贄となるように>と歌っている (詩篇 140,2)。

44.1) さて、人間の中で卑劣な者どもにとっては、その祈りは他者にとってのみならず、その人自身にもっとも極めて害の多いものである。もし彼らの唱える事柄が、幸運を願い求めそれを獲得したならば、獲得した彼らを害することになる。彼らは、その用い方を知らないからである。2) 彼らは、自らの持たざるものを獲得できるように祈るのであるから、彼らが願うのは見せかけの善であって実在する善ではない。3) それに対し覚知者は、すでに獲得したものの保持、彼がそちらに向かって進み行こうとする事柄への適性、獲得し得ないであろう事柄に対する恐れのないさ (adeotēta と読む) を願うであろう。そして覚知者は、靈魂に関わる真なる善が自らに備わり、それが持続するようにと願う。4) かくして彼は、持たざるものに対して欲求を起こすことなく、現に持てるものだけで自足している。彼は自らに固有の善に事欠いてはいない。神的な恵みと覚知により、すでに彼自身としては十分だからである。5) むしろ彼は自己充足しており、他のものに何も事欠くことがない。彼は全能者の望みを知悉してお

り、それを保有していると同時に祈り、万能なる力から離れることはなく、霊的であることに努め、限りない愛を通じて霊に一致している。6) この気高き人物は、万物の中で最も高貴なるもの・万物の中で最も善きものを知によって獲得しており、観想への専心によって俊敏であり、観想された事物の持つ力を持続的なかたちで靈魂のうちに獲得している。すなわちそれは、知の洞察的な鋭敏さなのである。7) このような力を彼は可能な限り獲得することを自らに課し、＜理性に戦いを挑むものども＞（ローマ 7,23）に対し、これを征する者となっており、止むことなく観想に専心し、快樂を精査吟味し為すべき事柄を正す修練によって鍛錬されているのである。8) これらに加え、彼は学びと人生に関わる多大な経験を活かし、自由闊達さを身に着けている。それは単に喋ることを止めない力というものではなく、ただ御言葉だけを用いる力であって、彼は時宜を得て語られうる事柄の何事をも、必要不可欠な時点において、恵みによっても恐れによっても隠すことをしない。

45.1) さて実に、彼は神に関する事柄を適わしき形で把握しており、まさしく真理の神秘的な合唱隊に向けての教えを授かっている。それは徳の偉大さに向けて勧告する御言葉によるものであり、その御言葉は、適わしく徳と徳から発するものを示す。彼はこの御言葉に拠るのである。彼はこうして、祈りにより神の息吹を受けて高められ、思惟的な事どもにも霊的な事どもにも、可能な限り覚知者に相応しく親しくなっている。2) ここからして彼は常に温順で柔和であり、親しみやすく愛される性格で、苦痛に耐えて賢明であり、理解力に富み志操堅固である。われらがこの人物は、腐敗に陥らないという意味においてばかりでなく、試みに遭わないという意味でも志操堅固である（というのも彼は靈魂において、快樂にも苦痛にも、決してそのような素振りを見せず囚われることもないからである）。3) 彼は、もし御言葉がそう招くのであれば、極めて公正な裁判官となり、いかなる場合にあってても情動に妥協することなく、正義がその本性に従って進むとおり、変わることなく歩みを進める。彼は、万物がまったくもって麗しく統べられており、徳を選択する靈魂にあっては常に優れた方向に歩みを進めると確信している。彼によれば、そのような靈魂は善そのものへと到達し、いわば父の＜前庭＞（ヘブライ 4,14）にあって、偉大なる大祭司から離れることがなくなるのである。

4) このようなわれらが覚知者は信厚き者であり、世界にある事物は最も良く統べられていると確信している。もちろん彼は、およそ生起する事どもを、喜びをもって迎

える．46.1) かくして彼は相応しくも、生活に関して不可欠な用途に位置づけられている事物を何も欲することではなく、何が有益であるかに関して神がすべてを知悉し、善き物事に関しては望まずとも備えられると確信している．2) 思うにちょうど、技術者には術智をもって、また異邦人には異邦人に相応しい仕方で与えられるのと同様、覚知者には覚知に満ちた仕方で、個々のものが付与されるのである．3) そして異邦の者から回心する者は信仰を、一方覚知に向けて昇り行く者は＜愛の完全性＞(1ヨハネ4,17)を求めることであろう．4) しかるに、すでに頂点を極めた覚知者は、観想が増し加わり留まるようにと祈る．それはちょうど、一般的な人間が変わることなく健康であるようにと祈るのと同様である．5) 実に、彼は決して徳から滑り落ちることのないようにと願うことであろうが、その際特に、過ちのなさが生き続けるように協働する．6) 彼は、天使たちのある者も気を緩めて地に堕ちたこと、そしてその理由とは、彼ら天使たちが、二心を持つことへの傾きから、かの一なる習慣へと自らを完全には鍛錬し切っていなかった点にあるということを知っている．7) 時間と場所に関わる事柄はすべて、この世において覚知の極みと、完全なる人間の持つ至高の高みにまで鍛え上げられた者には、行く道の途上で備えられる．それは彼が、躓くことなく生きることを選択し、あらゆる面において変わることのない覚知の不動性を通じて修練を積んだときに可能となる．8) いまだに、何らか重石となり下方に傾く無知 (agnoia と読む) が残っているような者どもには、信仰を通じて上方へと引き上げられる性質すら引きずりおろされてしまう．9) 実に、覚知に満ちた修練によって、徳を害われぬものにまで形作った者には習性が本性的なものとなって備わる．そして、ちょうど石には重さが伴うように、この人間には知が害われぬかたちにおいて、無理なく自ずからなるあり方で、理性的な・覚知的な・先慮に満ちた力によって成立するのである．

47.1) さて、害われぬあり方が、敬虔の念を通じ賢慮を通して害われぬものとなるとき、敬虔の念によっては罪を犯さぬことが、また賢慮によっては徳の害われぬあり方が支えられるであろう．2) 覚知は賢慮を提供するように思われる．それは、徳の保持に向けて助力することのできる事どもの洞察を教えることによる．3) 実に、神の覚知こそ最大のものである．それゆえ、この神の覚知によってこそ、徳の害われぬあり方が救い取られるのである．しかるに神を認識している者は、敬虔であり神を崇敬する者である．実にわれわれには、ただ覚知者のみが敬虔であるということが示された．4) この人間は、現にある善き事どもに喜び、約束された事柄について、これをすでに

現前している事柄であるかのように歓喜する。なぜなら、それがどのようなものであるのか、先んじて彼が知っている事どもについては、未然であって彼に知られていないということがないからである。5) かくして彼は、将来の事柄の各々について、それがどのようなものであるのかを覚知により確信し、これを獲得している。なぜなら不足しているもの・欠けているものは、満ち足りたものを基準として計られるからである。もし彼が知恵をすでに獲得していて、知恵が神的なものであるならば、非不足性に与かる者は不足せざる者となるであろう。6) というのも知恵の伝達は、運動したり、互いに完全態 (energeia)・分有性を抑制しあったりするものには生じないし、何かが奪い取られたり欠けたりすることもないからである。したがって完全態は、伝達そのものによって減じるものではないということが示される。7) かくしてわれらが覚知者は、すべて善きものを可能態 (dynamis) において有し、数値的なかたちで有することはない。なぜなら彼は、必須の神的な進捗と統御とに関して、変化を被ることがないからである。

48.1) このような人間に対しては、神も助力を惜しまず、それは絶えざる見そなわしというかたちでの敬意の表明による。というのもすべての事どもは、そもそも、善き人々への恵み・彼らの利と益のため、否むしろ彼らの救いのために起こっているのではなからうか。徳に関する事柄が、彼らを除外することは決してあり得ない。それらは彼らを通じて生起してきたのであるから。2) というのも、彼らの善き本性・聖なる選択意志に関しては、良く生きるための力を獲得した人々に、それ以降の救いを吹き込む方であれば、これを尊重するであろう。この方は、彼らのある者に対しては単に勧告するのみであるが、自ら適わしき存在となった者には助力を惜しまない。3) なぜなら覚知者には善のすべてが相伴って生起し、それは彼にあってその目標が、個々の事柄を知悉しかつ知的に遂行するということでありさえすれば、必然的なことだからである。たとえば、医師は健康に向けて協働する人々には健康を提供する。ちょうどそれと同じように神もまた、永遠に至る救いを、覚知と安寧に向けて協働する人々に提供する。その際、その人に行動が伴い、かつ律法が命じる事柄がわれわれにあって為されていれば、約束が成就される。5) そしてわたくしには、ギリシア人たちの間で次のように語られているのも美しいことだと思われる。昔、ある卑しからぬ競技者が幾多の時間を割き、自らの肉体を成熟するまで鍛錬した。この人はオリュンピアに上ると、ピサにあるゼウスの彫像に目をやり、こう言ったという。「おおゼウスよ、も

し競技に必要な事柄がすべて、すべからくわたくしによって準備されたとすれば、どうかわたくしに、正当なかたちで勝利を与えたまえ」。

6)かくして覚知者が、自らに関わる事どもを、責められようのないかたちで高貴に、学び・鍛錬・善行そして神に喜ばれることに向けて満たし終えたならば、すべてが完全な救いに向けて止揚される。7) したがってわれわれには、われわれに関わること、すなわち選択意志・望み・財・使用そして継続性が問い質され、かつわれわれに親しくあるいは不在のかたちでつながっている人々についても問われることになる。

49.1) それゆえ神と語らいあう者は、靈魂を染みなき状態で保ち、純粹に汚れのない状態で抱くことが必須である。とりわけ自らを完全に善き状態に作り上げる必要がある。もしそうでなくとも、覚知に向かって進捗を遂げ、覚知の獲得を目指すうちに、悪の仕業からは完全に身を引き離すべきである。2) だがそればかりでなく、祈りをすべて適切かつ似つかわしきかたちで行うことが望まれる。なぜなら他者の過ちに連座する危険性が存在するからである。3) 実にこれらの点に関して、覚知者はより一般的なあり方で信ずる人々とともに祈り、彼らに混じって共に行動することが相応しい。彼の生活は完全に、聖なる祝祭である。4) 言うまでもなく、彼にあつて生贄とは、祈り・讃美、そして祝宴に先立っての聖書との語らいあいであり、祝祭にあつても就寝前にあつても、彼は詩篇と讃歌の唱和につとめ、そればかりでなく夜間にも再度祈りを捧げる。これらを通じて彼は自らを「神的な合唱隊」(プラトン『ファイドロス』247E)と一致させ、絶えざる想起によって常なる観想の装備を整えている。5) ではどうなのだろうか。彼は今ひとつ別の生贄、すなわち教説をも財物をも要求する人々によるところの喜捨については知らないのだろうか。とんでもない。6) ただ口頭での祈りは多くの言葉を必要としないし、何を願うべきであるのかについて、彼は主から学び終えている。かくして彼は、いかなる場所においてであれ、取り立てて、あるいは多くの人々に見える形で祈ることはしない。7) むしろ彼は、散策や歓談、静養や読書、御言葉に従っての業に携わりながら、あらゆる仕方で祈りに励む。たとえ彼が、靈魂の＜宝物庫＞において、ただ父をのみ観想し、また＜言葉にならない呻きをもって＞父を呼び求めようとも(ローマ8,26)、父は彼が語っている最中でさえ、その近くに臨在する。8) しかるにあらゆる行為の目的は三つであるが(クリシッポス、倫理学的断片20以下)、彼は善きこと、有益なことを通じてすべてを実行に移し、一方一般的な生を送る人々にとっての快を通じて務めを果たすことは放棄するのである。

## VIII. 覚智者と誓い.

50.1) さて、このような敬神の念のうちに精査された者は、たやすく偽りを述べたり誓ったりすることからは遠く離れるに相違ない。なぜなら誓いとは、神の共在 (prospiralēpsis) を伴った普遍的な告白なのであるから。2) 一度信徒となった者が、どうして自らを不信なる者として呈したりしようか、また誓いを必要とすることがあろうか。彼にとっては、この生命そのものが継続的かつ決定的に誓いなのではないだろうか。3) 彼は生き生活し、告白の信正さを、躓かず確固たる生と言葉のうちに示す。4) もし不正を働くことが、それを為す者・語る者の裁きのうちにあり、不正を被った者の情動のうちにはないとすれば、彼は虚偽を述べたり偽証をしたりして、神性に対し不正を働くことはしない。なぜなら神性というものが、本性的に害のないものであるということを彼は知っているからである。また隣人がたとえ親しい存在ではなかろうとも、われわれは彼を愛することを学んでいるのであるから、隣人のために虚偽を述べたり、何らかその權益を侵したりすることはしない。ましてや自ら自身のために、虚偽を述べたり偽証をしたりすることは一層ないであろう。もし彼が、自ら進んで自分自身にとって不正を働く者であると見られたくないとすればの話である。5) 彼は決して誓うことはすまい。同意の際には単に<はい>、否定の際には<否>という発言をすることを選択するであろう。なぜなら誓いを立てるとは、いわば誓いを思惟から直接に披瀝することに他ならないからである。51.1) したがって彼にあっては、同意する場合であれ否定する場合であれ、「真にわたしは言う」という言い方を提示するだけで十分なのであり、これは、返答における彼の堅固さを見抜いていない者どもに対し、実証性として有効である。2) というのも思うに、外界にいる人々に対しては、信に値する生き方を有することが不可欠であり、そうであれば誓いを求められることもない。一方自らと、理解力ある人々に対しては適確な判断 (eugnōmosynē) が必要であるが、これは、自ずからなる正義だと言える。3) 言うまでもなく覚知者は、誓いに対して忠実であるが、誓うことに対して積極的ではない。実際、彼が誓うまでに至ることはごく稀であると言ってよい。これはすでにわたくしどもが述べたとおりである。4) だがそればかりでなく、彼が誓う際には、真理との調和にのっとり、真理を語ることが生ずる。かくして相応しき人々のうちにあって、正しき行為に従うならば、正しき誓いを為すということが生じるのである。5) ではいったい、真理の極みに従っ

て生きている人にとって、なお誓いを立てる必要がどこにあるのだろうか。実際、何も誓っていない人間には、偽証の必要性はさらさらなく、盟約に適った事柄からまったく逸脱していない者は、決して誓うことはないであろう。それは、行為における違反と完遂の批准が行われる場においての話であり、たとえば虚言を吐くとか、陳述・誓約の際に適正さを逸して偽証するとかといった判断が行われる場合のことである。6) しかるに正しく生きている人は、相応しい適正さを何ら逸脱することはないのであり、そこでは裁きのあり方は、真理にしたがって検証され、行為によって真の誓いが行われる。したがって彼にとって、舌による証言は不要なのである。7) 彼は至るところ・いかなる時にも神が存在することを信じており、真理を述べないことを恥とし、偽言を弄することは自らに似つかわしくないということを認識している。彼には、神の許での良心と自らの良心だけで十分なのである。8) かくして彼は決して偽りを述べるのではなく、盟約に反して何か行為をすることもなく、したがって誓いを求められて誓うこともなければ、たとえ拷問に遭って命を落とすことになろうとも、虚偽を言わないために誓うことを否むということもないのである。

## IX. 教育者の責任.

52.1) さて、他の人々を教育する任を帯びた者は、自らの覚知の意義をいっそう広く広めることになる。彼は、地上における最大の善をめぐる経綸を、言葉と業によって引き受け、その経綸を通して、神的なるものへの結びつきと交わりとの仲介役を果たすのである。2) しかるに地上なるものに信心を抱く人々は、いわば彫像が耳を持つかの如くに、像に向けて祈りを捧げる。彼らはこの彫像らに対し、堅固な誓いを懸けるのである。それとちょうど同じように、真なる御言葉の寛容さは、靈魂をもった彫像、すなわち人間の上に、信すべき師の許から及ぼされる。すなわちそれらの人々に対する善行は、かの主その方へと止揚される。そしてこの方の似像に倣って教育する方は、真の人間として、教えを受ける者を創造し、作り替え、救いに向けて新たにするのである。3) ちょうどギリシア人たちが、一種の止揚によって、アレスを銀、ディオニュソスを酒と呼びならわしているように、覚知者もまた、隣人にとっての益を、自ら自身の救いと見なす。彼は相応しくも、靈魂を持った主の彫像と呼ばれることであろう。それは彼の容姿の特性によるのではなく、むしろその力の徴、述べ伝え方の類似性に拠るものである。

53.1) ところで、心のうちにある事柄についてはすべて、人は、合意により聞くに値する人々に向かって舌に上せる。その際に彼は、自らの判断に基づき、生についても語る。2) 彼が真理について考えていれば、同時に真理を語るが、例外がある。それは治療の一環として行われる場合である。すなわち医者が病人に対し、その疲れた人々の救いのために、ソフィストよろしく偽ったり、偽りを述べたりする場合である。3) たとえば、真なる使徒（パウロ）はテモテに対して割礼を施したのであるが（使徒行録 16,3）、人の手で為される割礼が何の益にもならないということを叫びもし記しもしている（ローマ 2,25 ほか）。しかしながらこれは彼が、信仰による心の割礼に向けて律法から引き離すことで、なお逡巡しているユダヤ人聴講者たちを強いてシナゴグから引き離すようなことにならないように、ユダヤ人たちの状況に身を適合させくすべての人々を得るために、ユダヤ人となった（1 コリント 9,19）ためである。4) かくして使徒は、単に付き合いの意味までに、付き合いのある人々の救いのために身を降下させたのであって、妬みを持つ人々から正しき人々に対して持ち出された危険のゆえに、欺瞞に加担したというわけではなく、彼が強いられたというわけでは決してない。かくして覚知者は、単に隣人の益のためだけに何事かを為すことはあろうが、それは、その隣人たちのために為されるという以外には、彼によって意図的に行われる事柄ではないのである。5) この覚知者は、教会のために自らを奉献し、自らが信仰のうちに＜産み落とした＞（1 コリント 4,15）弟子たちのために、人間愛に満ち神を愛する教育者の経綸の極みを受け入れることのできる人々にとっての範例となる。それは御言葉の真理性の実証のため、また主に対する愛の発露のためなのである。6) この人物は恐怖にさらされてもそれに隷属することがなく、御言葉において真理を身に帯び、苦しみにあっても克己心を失わず、うわべだけの美辞麗句に欺かれることを望まず、そのような状況に置かれても、常に過たない意志を失わない。なぜならそれは虚偽であり、誰か姦策に長けた者によって語られたものに過ぎず、純白の言葉ではなく、悪に向けて働きを為すものだからである。54.1) 実に、覚知者のみが、どのような場所にあっても、真理に基づき、業と言葉において証しを行う。なぜなら彼はどのような場合においても、あらゆる事柄に関して正しく立ち、それは言葉、行い、そして想念そのものにおいてもそうなのであるから。

2) 以上が、駆け足で述べるならば、キリスト教徒の敬神の念である。もし信徒がこれらを相応しくかつ真直ぐなあり方で実行するならば、彼は敬虔にかつ正しく行動す



ることであろう。そしてもしそのような状況になるならば、真に敬虔で正しく、敬神の念に溢れているのはひとり覚知者のみということになるだろう。3) というのもキリスト教徒は無神論者ではなく（これは哲学者たちに対して実証すべき命題であった）、その結果何ら悪しきことあるいは恥ずべきこと、すなわち不正なることを、彼はいかなる仕方においても実行することがないからである。4) したがってその結果、彼は不敬に陥ることもなく、あるいはただ独り真に敬虔にかつ相応しく敬神の念に溢れ、真に神である方をまったき主導者また完全な王、全能者として、真なる敬神の念をもって敬虔に奉ずるのである。

#### X. 信仰から天使的智へ：覚智者は、真の完徳に向けて

どのような段階を歩むものであるか。

55.1) 覚知とは、言わば人間の人間としての完成（*teleiōsis*）であり、これは、人のあり方・生・言葉に関し、神的なことがらについての知（*epistēmē*）によって満たされた状態である。これは覚知自身に、また神の御言葉に合致し同意した（*homologos*）あり方である。2) 信仰はこの覚知によって完成される。それは信仰者がこの覚知によってのみ完全な者となるためである。実に、信仰とは何らか内在する善である。そして神を探究することなく神が実在することに同意し、この実在する方を讃美するあり方である。3) したがって、人はこの信仰から引き揚げられて神の恵みのうちに成長し、神をめぐる覚知を可能な限り携えることが必須となる。4) しかるにわれわれは覚知が、教えによって根づく知恵とは異なるものだと主張する。というのも覚知が何であるか、そのあり方に知恵もまったく従って存することになるからである。しかるに知恵のあり方、それはまったく覚知ではない。「知恵」という発語された言葉のうちにのみ、知恵という名が浮かぶのであろう。5) ただ神に関して疑わないこと、信じることこそ覚知の礎石である。そしてキリストは礎石であると同時に上層建築物でもあり、その両者である。つまり彼は初めであり終わりなのである。6) けれどもその頂点の部分、すなわち初めと終わり、わたくしに言わせれば信仰と愛であるが、それは学ばれるものではない。しかるに覚知は神の恵みにより、伝承によって伝えられる。つまり、自らをこの教えに適わしき者として呈する人々に与えられるのである。いわば預金として手がけられると言えよう。この覚知によって愛の価値が輝き出で、それは光から光となって伝わるのである。7) なぜなら＜持てる者にはさらに与えられる＞（マタイ 25,29）

からである。すなわち信仰には覚知が、覚知には愛が、愛には嗣業が加えて与えられる。56.1) この状態は、人が信仰と覚知そして愛によって主に結ばれ、われわれの信仰と愛の神であり守り手である方が、彼のいる場所へと彼のために昇り行くときに生ずる。2) こうして覚知はついに、この業に専心し、より大きな装備と鍛錬を願うことを通じて適わしいとされた人々に伝えられる。彼らは、語られる言葉に聴従し生を正し、掟に従った正義のさらなる実行に向けて力強く前進する人々である。3) この覚知は、終わりなくまったきものを究極まで主導するものである。その際われわれに、神にならった神とともに生きる方を予め教え、われわれをあらゆる懲らしめと罰則から解放する。その処罰とは、罪の故に救いに向けての教育のためにわれわれが耐え忍んでいるものである。4) この贖いののち、浄めを終え、またたとえ聖なる人々の間での聖なる勤めであろうと、そういった他の勤めをも果たして完徳に達したわれわれに、報奨と誉れとが与えられるであろう。5) こうして、主への親しさにより心において浄らかとなった人々を待ち受けているのは、永遠の観想 (theōria) による万物浄化 (apokatastasis) である。6) 彼らはその呼び名において<神々>と呼ばれるであろう、救い主によって先に定められた他の神々と座を同じくするものとして。7) こういうわけで、覚知とは速やかに浄めへと進むものであり、より善きものへの変容を従順に受け入れてゆくものなのである。

57.1) この故に、覚知は靈魂の中で生まれを同じくする、神的で聖なる部分へと移り住む。そして何らか固有の光を通して人間に神秘的な歩みを伝え、ついにはかの休らいの極まれる場への立ち帰りを果たさせ、心において浄らかとなった者に<顔と顔を合わせて> (1 コリント 13,12)、知と理解をもって神を観照する (epoptein) ことを教えるものである。2) というのも、覚知を経た靈魂の完徳とは、あらゆる浄めや勤めを超えて主とともにあることだからであり、そこでは永続的にこの完徳が完遂されることになる。3) 実に、信仰とは本質的な事柄の言わば簡潔な覚知である一方、覚知とは、信仰により把握された事柄の力強く確実な立証である。この覚知は、主の教えを通して信仰の上に変動することのないものに打ち立てられ、知識をもって把捉されたかたちを随行させる。わたくしに思われるに、異邦の者から信仰への転回は救いの第一の変容であり、信仰から覚知への転回は第二の変容である。そして覚知が愛のうちに極まるときには、友を友の、覚知者を覚知されるものの傍らに置く。5) おそらく地上にあって、そのような覚知を経た者は、すでに<天使にも等しい者> (ルカ 20,36) であら

う．実に、肉のうちなる完全な卓越性を極めた者は、常にその適わしいところに従って、より善きものへの変容を遂げ、聖なる 7・ヘブドマスを通り、父の家へ、真なる主の住まいへと運ばれてゆく．そして言わば消えることのない永遠に留まる光、いっどこにあっても変わることのない光となることであろう．

58.1) さて、主の働きの最初のあり方とは、われわれによって語られた敬神をめぐる褒賞のしるしである．証しとして、幾多ある中から、わたくしは預言者ダビデによっておよそ次のように語られたものを一つ、かいつまんで提示することにしよう．2) <主の山に登るものとは誰か．主の聖なる場所に立つ者は誰か．手に罪がなく、心浄らかな人．彼はおのが靈魂において虚しきことに囚われることなく、隣人の姦策に懸かって偽証することもない．彼は主から祝福を受け、彼の救い主である神から憐れみを受けるであろう．これこそ、主を求める人々、ヤコブの神の御顔を求める人々の子孫である> (詩篇 23,3-6)．3) 思うに預言者は、覚知者のことを簡潔に述べているのであろう．思われるにダビデはわれわれに、駆け足で、神こそ救い主であるということを示し、この方のことを<ヤコブの神の顔>と言っているのである．この方こそ福音で告げ知らされる方であり、父について教えた方である．4) それゆえ使徒も、子のことを<父の栄光の痕跡> (ヘブライ 1,3) と呼ぶ．この方は神に関する真理を教え、こう特徴づけた方である．<神にして父なる方は唯一> (エフェソ 4,6)．この方こそ唯一なる全能者であり、<この方のことは、子を除いて、また子が覆いを取り外さない限り、誰も知ることがない> (マタイ 11,27)．5) したがって、<ヤコブの神の顔を求める人々>にとって神が唯一であるということが、ここで述べられているのである．この方<だけ>を神として、<善き>父として、われわれの救い主であり神である方が特徴づけたのである．6) この方を求める人々の後裔とは<選ばれた種族> (1 ペトロ 2,9) であり、覚知に向かって探究を怠らない人々である．

59.1) それゆえ、使徒も次のように述べている．<もしわたしがあなた方に対して、啓示か覚知か預言か教えかによって語らなければ、あなた方にとってわたしは何の益にもならないだろう> (1 コリント 14,6)．2) それでもなお、ある事柄は直しく覚知していない人々によって、ロゴスに従うことなく行われることがありえよう．たとえば勇気に基づく場合である．3) というのも本性的に気概に溢れている人々があり、しかも彼らがロゴスに基づかずに実行に移ると、非理性的に多くの事柄に逸り、勇気に満ちた人々と似たような形で行うのではあるが、時に同じことを成し遂げるにしても、い

わば試金石のように易々と耐えてしまう。4) だがそれは覚知者にとってと同じ理由によるのではなく、同じ出来ばえを示すのでもない。たとえ<体のすべてを捧げようとも> (1 コリント 13,3) である。なぜなら、それは使徒によれば、覚知によって生まれる<愛を有していないから>である。5) かくして知者による行為はすべて善行であるが、無知なる者による行為は悪行である。それはたとえ迫害を潜り抜けたとしてもそうなのである。なぜなら彼は、その際に理性的に勇気を奮っているわけではないし、徳に向かう何か有益な事柄に基づき、回心の徳に発して自らの行為を直しているのではないからである。6) しかるにこれと同じロゴスは、他の諸徳に関しても当てはまる。したがって敬神の徳にも類比的に該当する。それゆえわれわれにとって、敬虔さに関して覚知者がそのような人であるばかりでなく、他の生き方に関わるモットーも知的な敬神に付随するのである。7) いまわれわれに課せられている課題は、覚知者の生き方を記述することであって、教義に関する理論づけを提示すべきときではない。これに関しては後に相応しい時機が訪れた際に、記述の文脈も考慮しつつ行うことにしよう。

XI. 覚智者、神の友の完成：真なる覚智者の生が記述される。特に、災厄にあつて  
いかにこの生が力強きものであるか、そしてもし神が命じたならば、  
死をさえもいかに甘んじて受ける者であるかが示される。

60.1) さて、覚知者は万物について真理に基づきかつ崇高なかたちで捉え、いわば神的な教えへと歩みを進める。まず彼は被造物について驚嘆することから始め、覚知を得ることができるという徴を、己のうちから携え、主の熱心な弟子となる。そして直ちに神の声を聞くや、自らが驚嘆した事どものうちから先慮を信ずるに至る。2) 隠してこの地点から出発し、彼はあらゆるあり方を駆使して学びのために協働し、自らの望むことについての覚知を得ることができるであろう事柄すべてを為す(願望とは、信仰の進捗につれて、探究と混交しつつ成立するものである)。しかるにこれは、これほどまでに壮大でかつ長き時間を要する観想に適う者となることを意味する。3) こうして覚知者は、神の意向を味わうに至る。というのも彼は、語られることによって明らかにされる事柄に対して、聴覚ではなく靈魂を差し出すからである。4) こうして彼は、言葉を通じて相応しくも、その本質と事柄そのものを把握するに至り、必要な事柄に向けて靈魂を向け、<姦淫するな、殺すな>という言葉了他ならぬ覚知者に向けて語られたものと受け止める。これは他の諸派の人々の受け取り方とは異なる。

61.1) こうして覚知者は、知的な観想によって鍛錬を受けると、より普遍的かつより崇高な仕方で語られた事どもと格闘すべく歩みを進める。彼はすでに、預言者によれば（詩篇 93,10 以下）＜人間に覚知を教える方＞とされる存在が＜主＞であり、人間の口を通じて主として働きを為す方であるということをよく知っている。この方は、こうして肉を摂ったのである。2) かくして相応しくも、彼は決して、益を為すものに先んじて快を選んだりすることがない。また彼のことを、妙齡の女性が遊女のような仕方で誘い、戯れにも強いて彼を捕えたりすることもあり得ない。ヨセフに関して、彼の主人の妻が、掟から逸らせて無理やり誘うことはできなかった（創世 39,12）。ヨセフは彼女のために、力づくで衣を捕えられ、衣を脱いで、裸になって罪から逃れたものの、倫理性の品格は纏ったままであった。3) というのももし、主人、すなわちエジプト人の目がヨセフを見ていなかったとしても、全能者の目が見ていたからである。4) われわれは声を聞き身体を見るのであるが、神は、そこから声を挙げたり見たりすることが行われるその事柄自体を吟味するからである。5) したがって、たとえ覚知者に病や、危機的状況が何か襲い掛かったとしても、否最も恐怖に満ちた死が臨んだとしても、彼は靈魂において動揺することもなく、すべてそのようなことは被造物には必然であるということを知悉し、そればかりでなくその体験は、神の力で「救いのための薬」（エリヒデス『フェキアの女たち』893）となるのだということを認識している。それらは、作り変えられるのがより困難な人々に対し、教育を通じて慈しみを示すものであり、善き先慮によって真に相応しく分かち与えられるものなのである。

62.1) かくして覚知者は、諸々の被造物を用いるが、それは御言葉が選んだ際に、御言葉が選ぶ限りにおいてである。その際彼は、創造者への感謝を忘れることはなく、その享受のあり方は、主が定める。2) 彼は決して憎しみの記憶を留めることがない。それは、為された事柄に関して、憎しみに値する場合であっても変わることがない。3) 彼は創造者を崇め、生を共にする人を愛し、その人の無知に対しては憐れみをかけ、祈りを捧げる。4) そして本性的に情動にさらされる身体を鑑みてともに苦悩を味わうものの、情動の故に当初から情動に苛まれるということはない。5) 実に彼は、意のままにならぬ状況に際しては自らを労苦から解き、自らを本来の持ち場へと引き上げ、自身にとって異縁なものに関わることはしないものの、自らに必須の事柄には携わる。ただそれは、靈魂が損なわれずに保たれる限りにおいてである。6) というのも彼は、仮定のうちにあることを望まず、また憶測に忠実であることを望んでいるのでもなく、

ただ、確固たる業と活力ある言葉による限りにおいて、覚知と真理とに信を置くことのみを望むからである。7) かくして彼は、美なる事物を讃美することもなければ、彼自身が美しくあることを強いられることもなく、＜善く忠実な僕＞(マタイ 25,23) から、愛を通して＜友＞(ヨハネ 15,15) へと変容を遂げる。それは習性の完成によるが、その完成とは、真なる学びと幾多の修練を通じて浄らかに勝ち取ったものである。

63.1) かくして、覚知の極みにまで至ることを余儀なくされた者は、品性において整えられ、身だしなみにおいて破綻をきたさず、真なる覚知者の獲るべき限りのものをすべて持し、麗しき諸々の像に目を注ぐ。彼に先立って生を正した多くの人々を族長とし、幾多の人々を預言者とし、われわれのためなる数限りない人々を天使と見なし、すべてに関して教えを垂れ、かの頂点に位置づけられる生を獲得しうることを表明する方を主とする。それゆえ、世にあるすべての安易な美を愛さないが、それは彼がこの地上・世俗に留まることなく、むしろ希望される事柄、否むしろすでに覚知されていることを希望された事柄として、把握するためなのである。2) かくして彼は、労苦や試みや艱難を、哲学者たちのうちの勇猛な人々のようにではなく、現在の苦痛は止み、再び甘美さに与かれるという希望の許に耐え忍ぶ。そしてむしろ彼には、覚知が、将来起こり得べき事柄を獲得するための最も確かな手綱として生まれる。それゆえ現世における懲らしめばかりでなく、およそあらゆる快樂を軽んずるのである。3) 実に、かの幸いなるペトロは、自らの妻が死へと引かれてゆくを見て、召されて天上の祖国に挙げられることの恵みを喜び、大いに勧告的にまた激励風に声を挙げ、妻の名を呼んで＜おお妻よ、主を忘るなかれ＞と叫んだと言う(功せ<sup>レ</sup>オ『教会史』3.30.2)。

64.1) このような状況こそ、幸いなる者たちの結婚であり、最も愛しきものに至る完全なあり方である。2) そのような意味において使徒も＜結婚している者は、結婚していない者のように＞(1 コリント 7,29) と述べ、結婚が情動を伴わず、主への愛から＜引き離すことがない＞(1 コリント 7,35) ものであることを価値あることとしている。真なる夫は、この世での生から主の許へと旅立つ妻に対し、主への愛のうちに留まることを勧告したのである。3) いったい、死後の希望に対する信仰というものは、懲らしめの極みにあってすら神に感謝を捧げる人々にとっては、いとも自明のことなのではないだろうか。というのも思うに、彼らは確たる信仰をすでに獲得していたのであり、彼らの力強さが信に満ちたかたちで相伴ったのは、その信仰ゆえだったからである。4) かくして覚知者の靈魂は、何時いかなる状況にあっても力づけられており、その様は

さながら、陸上競技者の身体が、健康と力強さの極みにあるような状態である。5) というのも彼の靈魂は、人間世界の事どもに関して賢明であり、正しきことを通じて為すべき事柄を識別し、物事の端緒を天上なる神の許より得て、神的な似姿性に倣い、快と身体的苦痛の温順なあり方を確立しているからである。一方彼は諸々の恐怖に対しては果敢に闘い、神に従いつくす。6) 実に、覚知を極めた靈魂、完全な徳によって飾られた靈魂は、まさしく神的な力のこの地上における似像であり、本性・鍛練・言葉、これらのすべてによって増し高められた徳である。7) その靈魂の美しさは、福音に適う態度を全生涯にわたって獲得するとき、まさしく＜聖靈の神殿＞のものとなる(1コリント 6,19)。

65.1) そのような人は実に、あらゆる心配、あらゆる恐怖をものともしない。それは、死に対する恐れのみならず、貧困・病気・不名誉、さらにはそれらと質を同じくすることどもに対するものにまで及ぶ。快樂に圧せられることなく、非理性的な欲望の覇者となるのである。2) というのも、彼はなされるべき事柄とそうでないことを知悉し、真に恐怖を抱くべきこととそうでないこととを力強く弁えるからである。3) ここから彼は、御言葉・ロゴスが為すべきこと・彼に適切なこととして規定している事柄について、十全な知を持って自覚し、真に敢行すべき事柄(すなわち善)と見せ掛けだけの善を、また恐るべき事柄とそう思われるだけの事物、たとえば死・病・貧困など、真理よりもむしろ臆断によるものを、意識的に識別するのである。4) この人物こそ真に、情動の外にある善き人間であり、徳に満ちた靈魂の習慣性と状態をもって、情動に支配される生き方を悉く超越する。この人物によれば、「すべてが自らに拠って」(プラトン『メネキス』247E) 完全性の獲得に資するものとなる。5) いわゆる偶発的恐怖と言われるものは、真摯なる者にとっては何ら恐るべきものではない。なぜならそれは悪ではないからである。一方真に恐るべきものは、キリスト教徒覚知者とは対極の位置にある異縁なものであり、それは悪であるが故に善に譲るものである。まったく逆なるものが、一緒に、同じ場所で、同じ時間に出遭うということはいえない。6) かくして、間違いのないかたちで「生のドラマを演ずる」(古代喜劇作家断片集、作者不詳断片 245) 者は、そのドラマとは神が苦闘すべく提供するものであるだけに、為すべきこと・耐えぬべきことを識別するのである。

66.1) かくして、もし臆病(deilia)が恐ろしきこと・恐るべきでないことに関する無知によって生ずるとするならば、覚知者は単に自信に満ちた者だというわけではな

い。彼は善き事柄・善いであろう事柄を識別するだけでなく、それらと併せて、すでに述べたように（『ストマテイス』7.11.65.3）、真に恐るべきでない事柄についても知悉している。彼は、ただ悪だけが敵であり、覚知へと進み行く事柄を無に帰せしめるものであるということを知悉して、主の武具により防御され、この悪と格闘する。2) もし、無節制と悪魔の働き、否むしろ協働によって何かが生起するのであれば、そのものこそまさしく悪魔もしくは無節制であろう（なぜならそこには節慮がまったく働きをなしていないからである。節慮とは習性であるが、習性がまったく働きを為していない）。かくして無知によって生起した行為はすでに無知でなく、無知による悪であり、決して無知ではない。というのも情動も過ちも、悪からもたらされるものではあるが、悪ではないからである。3) かくして覚知者は、非理性的に勇敢なのではない。3) 人は、恐れるべき事柄に対する無知ゆえに恐怖に立ち向かう子供たちを、勇敢な者と呼ぶがよい（彼らは炎にも手を差し出す）。同様に槍に追い立てられる獣も、理性に与かっていないながらも徳を秘め、勇敢であると言われよう。おそらくは奇術師たちについても、ある種の経験から短剣に身をさらす際、勇敢だと言われるのであろう。そこには哀れな報酬への悪しき打算が働いているのだが。4) しかるに真に勇敢なる者は、多くの人々の嫉妬ゆえに危険を明白な形で有しているにもかかわらず、襲い掛かってくる事柄をすべて果敢に受け止める。こうして彼は、他の「証聖者」と呼ばれる人々とは身を離している。そのあり方は、一方は自分では知ることなく、自身に端緒を与えて、自らを危難にさらすのに対して（表現を慎むのが正当である）、他方は直しきロゴスによって守られ、しかる後神が真なる招きを行った際には進んで自らを奉獻する。彼は＜召命＞（2ペトロ 1,10）に対し、自らには何も性急なことを課さないという仕方でこれを＜確かなもの＞とし、勇敢さについては、真理に倣った理性的な勇敢さのうちに吟味することができる者なのである。67.1) かくして彼は、より大いなる恐怖に対する恐れから、より小さな恐怖を、他の人々と同じように堪忍するということはなく、また同じような敬意を受ける同じような心ばえの人々からの非難に煩わされることもなく、召命への同意のうちに留まる。だがそればかりでなく、神への愛ゆえに進んで召命に従い、神の前での歓喜ということ以外の目標を選ばない。それは労苦の褒賞を意識するという理由でもないのである。2) ある人々は名誉欲から、またある人々は他の更に過酷な懲罰に対する警戒心から、またある人々は死後に予想されるある種の快樂や悅樂のゆえに、まるで子供のように信仰のうちに留まる。彼らは幸いではある。



だが未だに、覚知者の如く、神への愛のうちにある成熟した人間とはなっていないのである（というのも体育の競技会におけると同じように、教会にあっても、成人と子供たち双方のための栄冠が用意されているのだから）。むしろ、愛はそれ自体が、何か別のもののためにではなくそれ自体のために選び取られるべきである。3) かくして覚知者にあっては、覚知とともに勇敢さの完成が、ほとんど生の修練を通じて成長してゆくのであり、その際に彼は、常に情動を克服すべく心がけるのである。

4) さて愛は、恐怖心も不安もなく、主に信を置く者に対して、彼に油を注ぎ鍛錬を施して、自ら専属の競技者へと形成してゆく。それはちょうど正義が、彼にあってその生涯のすべてを通じて真理を語るよう鍛えあげるのと同様である。5) というのも正義に関する要約の段には次のように語られている。＜あなた方のなすべき業とは、「然りは然り」「否は否」と答えることだけである＞（マタイ5,37）。この同じ言葉は、節慮にも該当する。6) というのもそれは、名誉欲からではなく（ちょうど陸上競技者が、栄冠や表彰を目指すように）、金銭欲からでもなく（ある人々が、何か極度の苦しみを体験しつつ善を追求して節慮を得ているかのようなふりをするように）、また健康目的での身体愛からでもないからである。また、田舎住まいの克己者が快楽を絶ったところで、それは真理に根ざした節慮の獲得ではない（言うまでもなく、農夫の生活を送っている者が快楽を享受して、克己の操を折り、快楽へと走ることはある）。7) このような人々は、法と恐怖とによって阻まれた人々である。というのも彼らはチャンスを得ては法をかすめ、美しきあり方を回避するのであるから。8) むしろ節慮はそれ自体として選択されるべきものであり、覚知によって完成されて永続的に留まるべきものであり、この人物を主人また自由人として整える。それは彼が節慮あり情動に動かされず、快楽や苦痛には揺らがされぬ覚知者となるためである。それはちょうど、ダイヤモンドが火にも屈しないと言われるのと同じあり方である。

68.1) こういったあり方の原因とは、あらゆる知識の最も聖にして最も主導的な愛である。最上にして最も卓越した存在、実に「一者」として特徴づけられる方への仕えを通じて、彼は友にして子なる者を覚知者として作り上げ、真に＜成年の域に達した完全な人＞（エフェソ4,13）として成長させるのである。2) だがそればかりではなく、同一の事柄をめぐる同意とは和合であるが、それは同じものをめぐる一性でもある。一方友情とは類似性を通じて画されるものであり、共通性とは一性のうちに置かれるものである。3) 実に覚知者とは、真に唯一なる神に愛された者として、真に完全な人

間、神の友であり、子という身分に選ばれたものである。4) というのも「生まれの良さ」「覚知」「完徳」といった様々な名は、神に対する観照 (epopteia) によるものであり、この観照とは、覚知に満ちた靈魂が刻む極みの足取りだからである。この靈魂とは完全に浄らかとなったものであり、使徒の言う<顔と顔を合わせて>全能なる神を永遠に眺めるに相応しいとされたものである (1 コリント 13,12)。5) というのもこの靈魂は、その全体が靈的なものとなり、生まれを同じくするものに向かって歩みを進め、靈的な教会 (ekklēsia) に留まって、神の休らいへと向かうからである。

## XII. 覚智による自己放棄と使徒職：真なる覚智者は、

善行をなし慎み深きものであって、あらゆる世俗的なものを蔑むこと。

69.1) この件については以上としよう。覚知者の身体と靈魂に関わるあり方は以上のようなものである。隣人たちに対しても、たとえ奴隷であれ、法に反する者であれ、あるいはいかなる者であろうとも、彼は等しく同じ者として見出される。2) 彼は、神の法に照らし、兄弟を軽蔑したりすることはない。それはその兄弟が、父を同じくし母を同じくする者だからである。言うまでもなく、彼は打ちひしがれた者を慰めと激励によって支えてやり、生活上の必要には応えてやる。すべて事欠く者たちには与えてやるものの、その仕方は一様ではなく、正しくまたそれぞれの分に応じたあり方による。加えて自らを迫害する者・憎む者に対しても、もしその人が事欠いていたならば与える。その際にたとえ、「恐れから自分にも与えたのだ」などと彼らが言おうとも、それは意に介さず、恐れではなく援助の意味でそうしたのだ、と考えるものである。3) というのも、敵に対して金銭を物惜しみせず、ひどい仕打ちを思い起こさないあり方というのは、身内の者たちに対する愛情深いあり方に対してどれほど優っていることだろうか。そのような人物は、こういった状況からさらに歩を進め、とりわけ誰にどの程度、何時どのようにして与えるべきか、その精確な知識を得るに至る。4) 何時いかなる時にも敵意の原因を提供しないような人物にとって、いったい誰が、正当な意味で敵となることだろうか。5) 神に関してわれわれは、神は何人にも対立しないし、何者の敵でもないと言う (というのも神は万物の創造者であり、神の望まないものは何一つ、その配下には存在しないのだから)。しかるにわれわれは、不従順で神の掟に従って歩まぬ人々を、神の敵であると言う。それはたとえば、神の律法に敵対する者どもに関してである。ちょうど同じあり方を、われわれは覚知者に対しても見出すこ

とができるだろう。6) すなわち彼自身は、誰に対しても決していかなるあり方においても敵とはならない。しかるに逆の道を歩む者たちは、彼の敵だと考えられよう。それはとりわけ、われわれにおける分かち合いの習性が正義であると言われる場合である。7) だがそればかりでなく、より優れた事柄・より劣った事柄の価値判断に際し、それらに関して知識をもって接するのが適切な場合、最も至高の種類の正義がそこに関与することになる。8) 実に、これはある種、ある人々による誤解 (idiōtismos) によって打ち立てられた教説、たとえば快樂をめぐる克己に関して見られる状況である。たとえば異邦人の間では、「ある人の愛するものを手に入れる」(テオゲニス 256) ことができないという状況から、また人間に対する恐怖心から、より大きな快樂のために、飲み物に関する快樂を差し控える、という人々がいる。ちょうどそれと同じように、信仰にあっても、福音のためまた神に対する恐れから、克己に努める人々がある。70.1) だがそのような克己は、覚知のための礎石、またより優れたものに向かう導き、あるいは完全なるものに向けての衝動である。聖書は語る。〈主への恐れは知恵の始め〉(箴言 1,7 ; 9,10)。2) しかるに完全なる人は、愛を通じてくすべてを忍び、すべてに耐え、人間に喜ばれるようにではなく、神を喜ばせるために行う〉(1 コリント 13,7 ; 1 テサロニケ 2,4)。3) そしてたとえその結果として、賞賛が彼に伴ったとしても、彼はこれを自分の益のためにではなく、賞賛してくれる人々の模倣と有用性のために転ずる。4) 別の意味づけによれば、克己者とは単に情動を制するだけでなく、諸々の善に関しても克己者となり、知識に関してその壮大さを堅固に獲得し、そこから徳に適った力動性を汲み取る者を言うと言われる。善の知的な獲得は、確固たるもの・変じないものであり、神的な事ども・人間的な事どもの知識となる。6) かくして覚知は決して無知となることはないし、また善が悪に転ずることもない。それゆえ彼は、食べることも飲むことも結婚することも、主目的としてではなく、必然性として行うだけである。つまりわたくしの言う意味は、もしロゴスが結婚することを選択し、それが適切であれば、ということである。完全な人となった者は、使徒的な像を帯びているからである。7) そして真に、男性であれば、孤独な生に疲弊している様を表すのではなく、むしろ結婚と、子を儲けることと、家庭の気遣いによって、快くないことにも折れることなく鍛え上げられた人間として、「男たちに対して勝利を収める」ことであろう。そして家庭に関する気遣いととも、神への愛からも離れることなく、子供たちや妻、召使たちや財産といった事どもを通じてもたらされる試練すべてをものとしめないことで

あろう。8) だが家庭を持たない者には、未経験なかたちで多くの事柄が降りかかってくる。実に、自分一人だけを気遣う者は、自らの救いに関して遣される一方で、生活をめぐる経綸のうちに躓き、真理による先慮の像を無為にわずかししか留めないあり方に、打ち負かされてしまうのである。

71.1) われわれは可能な限り、靈魂を多様な方法で前もって鍛練する必要がある。それは、靈魂が覚知を受容する上で十全に働くようにするためである。2) いかにして蜜蝋が柔らかくなり、また銅が純化されて、その上に書きとめられる文字を受容するに至るか、ご存知であろう。3) まさしく、ちょうど死が<靈魂が肉体から分離すること>とされる(プラトン『ファイドン』67D)のと同様に、覚知とは理性における死のようなものである。すなわち覚知は、諸々の情動から靈魂を分かち離して、人を善き行為に満ちた生へと導く。それは、靈魂がついには神に向かって臆することなく<われはあなたの望みのままに生きる>と言えるようになるためである。4) というのも<人を喜ばせること>を選択する者は、<神を喜ばせることはできない>(ガラテヤ1,10)。つまり、役立つことをではなく、心地よいことを選択する人が多いのである。だが神を喜ばせる人は、人々のなかで真摯なる人にとって喜びとなるということが、必然的な結果として生じる。5) したがって、この人物にとって食べ物や飲み物に関すること、あるいは性的な快樂が、どうしてもなお喜ばしき事柄でありえようか。なぜなら彼にはすでに、ある種の快樂と思惟の運動と働きをもたらす御言葉・ロゴスが喜ばしきものと映っているのであるから。6) すなわち<誰も、二人の主人すなわち神とマモンとに同時に仕えることはできない>(マタイ6,24)のである。主はここで、単に金銭のことを述べているのではなく、金銭に発するさまざまな快樂への導きのことを語っているのである。まったく、神を寛容な心で真に覚知した人物には、それと対立する諸快樂に隸属することはできない。

72.1) かくして、原初より欲情のない人間というものはただ一人、人間愛に満ちわれわれのために人となった方のみである。彼によって与えられた刻印に似ようと努める者はみな、修練によって欲情を持たぬ者となるように強いられる。2) 欲情を持ちながらも自らを持し、欲情なき者となる人は、ちょうど節制によって再度処女となる寡婦のごとき存在である。3) かの覚知の報酬は、救い主にして師たる方であり、その報酬とはこの方自らが求めたものであり、それは諸悪からの離脱、善行を行う力であって、これらを通じて救いが生起する。4) かくしてちょうど、術知を学び終えた人々が、

教わった事柄を通じて糧を得るのと同じように、覚知者は、自らが知った事柄を通じて生命を獲得し、救われる。欲求を抱かぬ者は靈魂の情動を打ち砕き、自らを死した者とする。しかしながら思われるに、靈魂における無知は滋養の欠如であり、覚知は滋養物であろう。5) 覚知に満ちた靈魂とは、福音書が、主のことを待ちわびて歓迎する聖化されたおとめたちになぞらえるものである（マタイ25,1-13）。おとめたちとは、諸悪から離れ、愛によって主を待ちもうけ、諸事物の観想のために自らの光に灯を点す人々である。6) 思慮ある靈魂たちはこう語る。＜おお主よ、われわれはあなたを、すでに獲得していることを望みます。われわれはあなたが命じた事柄に従って生きてきました。命じられた事柄のいかなる点に関しても踏み外すことはありませんでした。それゆえ約束された事柄を望みますが、それが甘美なものではなく、益となるものであることを祈ります、あなたから最も美なるものを願うことが相応しいことであるように。そしてわれわれは、すべてを益となるように受け取りたいと思います。たとえ、さらにやってくる鍛錬が悪しきものに思われるとしても、それはあなたの経綸が、堅固さに向けての鍛錬のため、われわれにさらに要求されることなのです＞。

73.1) さて覚知者は、敬虔さの溢れゆえに、望んでいないのに手に入れることよりも、むしろ自ら積極的に願って手に入れないことのほうを願う。彼にとって、生活のすべてが祈りであり神に向かう語らいなのであって、もし罪から免れていさえすれば、彼は望むものを悉く手に入れるであろう。神は義人に向かってこう語る。＜求めよ、そうすればわたしはあなたに与える（マタイ7,7）。思いを致せ、そうすればわたしが実行する＞。2) かくしてもそれが有用な事柄でありさえすれば、彼は直ちにそれを入手することであろう。一方、有用でない事柄を彼が望むことは決してなく、それゆえ入手することもない。こうして彼が望む事柄が実現してゆく。3) たとえ誰かがわれわれに、お願いだからある罪人たちと会って欲しいと言うとしても、これは神の義なる善性のゆえに稀にしかあり得ず、また他者に対して慈善を尽くせる人々に託されるであろう。4) かくして賜物は、願い出る人のゆえに実現するのではなく、むしろ、主によって救われるはずの人物を先見する経綸が、その賜物を改めて正しいとすることによって生ずるのである。こうして、それに値する人々にであれば、真によき事どもは、たとえ彼らが願わずとも与えられる。5) ここからもしある者が、強制・恐怖・期待のゆえにでなく、むしろ選択意志のゆえに正しき人であるならば、その道は王的であると言われる。その道を先導するのは王の一族だからである。一方他のわき道は破滅に至

る道であり、それを辿ればまっさかさまに墜落することになる。6) かくしてもし人が畏れや敬意を失うならば、齒に衣着せぬ高貴な哲学者たちであっても、なお艱難に耐え抜けるかどうかは不明である。

74.1) さて、欲情ないしその他の罪は<茨やとげ> (エゼキエル 28,24) であると言われている。そこで覚知者は、主のブドウ畑において、植え、剪定し、水をやる仕事に従事し、信仰へと植え替えられた人々のまさしく神的な農夫となって働く。2) 悪を行わない者たちは、休暇の報酬を受けるに値する者とされ、純然たる選択意志から善を行う者たちは、善き働き手として報酬を求める。言うまでもなく彼は、二重の報酬を受けるであろう。一方は、彼が行わなかったことについて、もう一方は、彼がよく勤め上げた事柄についてである。3) この覚知者は何人からも試みられることはない。ただ神が、それを共に生きる人々の益のためにも行うようにと勧めるだけである。かくして彼らは、勇気ある忍耐を通じて勧告を受け、信仰に向けて力づけられる。4) 言うまでもなく、幸いなる使徒たちはこうして、諸教会の基礎づけと確立のために、試練と完全性の証しへと導かれていったのである。5) 実に覚知者は、「この者はわたしが打つ、お前は憐れめ」と語る、耳に響く声と共にあり、憎しみを持つ人々には回心するように要求する。6) 悪人たちに対する処罰が競技場で執行される様は、子供たちにも見せてよい光景ではない。というのも、そのような光景によって覚知者が教育されたり喜びを見出したりすることは決してあり得ないからである。彼は選択意志によって美また善なる者となるべく修練を積むのであり、こうしてこそ諸々の快樂にも揺るがぬ者となるからである。彼は決して過ちに堕ちることはなく、他者の悪の範例によって教育されることもない。7) この人間は、地上的な快樂や見世物に興じることからはおよそほど遠いし、世俗的な申し出に関しては、たとえそれが神的なものであろうとも、これを蔑む。8) <「主よ、主よ」と言う人間だけが神の王国に入るのではない。神の意向を実行する者が入るのである> (マタイ 7,21)。9) この者こそ、覚知に満ちた実行の人であろう。そしてなお肉のうちにあろうとも、<世の欲情>を征する人であろう。そして彼が知った事柄に関しては、たとえ将来の、まだ見ぬ事柄であろうとも、それらが現在の事柄にも増して、今まさしく行われていると確信し、そう考えるのである。

75.1) この人物こそ有能な働き手であり、自らの知る事柄に喜びをなす。ただ生活の必要性に絡む事柄には質実であり、自らが知った事柄を発動させるのに参与するには、まだ自らは値しないと踏んでいる。かくして、この世の生に関しては、それが他

人のものであるかのように考えて、必要に迫られる分だけを用いるに過ぎない。2) 彼は、定められた日に行われる断食のもつ隠された意味をも知悉している。それは四日目（水曜日）、そして準備の日（金曜日）におけるものである。婉曲な言い方では、前者はヘルメスの日、後者はアフロディテの日とされる。3) 言うまでもなく彼は、財に執心する生活・愛欲をむさぼる生活を断つ。それらからすべての悪が発生するからである。すでにわれわれはしばしば、天上界における姦淫として三種類を挙げてきた（『ストロマテイス』 3.12.89.1 ; 6.16.147.1）。それは快樂愛、金銭愛、そして偶像崇拜である。

76.1) かくして覚知者は、律法にしたがって悪しき行為を断ち、福音に説かれる完全性にしたがって悪しき想念を断つ（マタイ 5,21-48）。2) そのようなわけで、試みすら彼にあっては浄めのためではなく、上述のように（『ストロマテイス』 7.12.74.3）、隣人たちの益のためのものである。そしてもし苦悩や苦痛の試みを受けたにしても、それを軽んじ、やり過ごしてしまう。3) 快樂に関する彼の主義も同様である。すなわち彼にあって最大の点は、彼が試みに遭いながらもそれを遠ざけるに至ったという点である。4) 人がまだ知らぬものをも克服してしまうとすれば、これよりも偉大なことが何かあるうか。この人物は、福音による掟を実行に移し、かの日を主の日とする。そしてこの日に彼は、悪しき想念を打ち棄て覚知的な想念を抱き、自らのうちにおいて主の復活を讃め称える日とする。5) だがそればかりでなく、彼は知的な観想を捉えた際には、主を見たものと解し、自らの視野を見えないものへと転ずるのである。6) 彼は、見たいと望まないものが見えたと感じたならば、視覚を精査する。これは彼が、視覚の攻撃に際して、快樂に打ち負けている自らを感じ取った際のことである。なぜなら彼は、ただ自らに適わしき事柄のみを見たり聞いたりすることを望むからである。7) 言うまでもなく彼は、兄弟たちの靈魂を觀照し、肉の美についてはこれを靈魂において觀ずる。彼の靈魂は、肉の快樂を伴うことなくただ美だけを觀ることに習慣づけられている。

77.1) さて兄弟とは、真に選ばれた創造において、また共通の習性において、そして業の実質において、同一の聖にして美しき活動をする人々のことである。その活動とは、主が彼らに対し、選ばれた者として思いを致すよう望んだものである。2) というのも、信仰とは同一の事柄を選択することのうちにあり、覚知とは同一の事柄を学び想うことのうちにあり、希望とは同一の事柄を望むことのうちにあり、希望とは同一の事柄を望むことのうちにあり、希望とは同一の事柄を望むことである。たとえ、生活上の必要からわずかな時間を食糧のことに割くとしても、彼は

その事柄によって気を逸らされ欺かれたと考える。3) かくして彼は、選ばれた者に適わしくない夢すらも、決して見ない。まさしく彼は、そのすべてが、この世の生のあらゆる面において＜旅人にして居留者である＞（ヘブライ 11,13）。彼は都市に住まいつつも、都市にあって他の人々から驚嘆されているような事どもを軽蔑し、あたかも人気のない町に住んでいるかの如くである。これは場所が彼に強いるのでなく、選択意志がその場所を正当であると示すようにするためなのである。4) 要するにこのような覚知者は、使徒的なく不在＞でもって（フィリピ 2,12）、正当にこの人生をまっとうし、精確に覚知を働かせ、近しい人々を益し、隣人の＜山を動かし＞（1 コリント 13,2）、彼らの靈魂の平らかでない部分を除去する。5) 実に、われわれの一人一人が、彼のブドウ畑であり彼のための働き手なのである。もっとも彼自身は最善のことを為しつつも、人々がそのことを知らないでいてくれるように望み、主を信じまた彼自らを信じて、自らが掟に従って生きていることを、彼がそうあると信じた事柄から判断するのである（福音には＜人は、その心のあるところ、そこにその人の宝もある＞と述べられている（マタイ 6,21））。6) そして彼自身は、自らを貧しくあらしめるが、これは艱難のうちにある兄弟を決して軽蔑することがないようにするためである。これは愛における完全性の要請によるものであり、彼が、兄弟よりもむしろ自ら自身の方がより容易に困窮を耐えられるであろうと知っていればこそその行為である。

78.1) 覚知者は、他者の痛みを自らの痛みと捉える。たとえ自らの乏しき持ち物の中から、慈善的に差し出して何か苦痛を被ったとしても、それに不興を覚えることもなければ、かえって一層自らの善意を増し高める。2) というのも彼は、諸事物に関する混じりけのない信仰を持ち、福音を業と観想によって讃美するからである。実に彼は＜人間からではなく、神から讃辞を＞（ローマ 2,29）獲得し、主が教えたことを完遂するのである。3) この人物は、自身の希望によって欺かれ世の美しきものを享受するということがない。彼はこの世にあるものを悉く蔑むからである。死後に教えを受け、懲罰により意に反して告白することになった者たちのことを憐れみ、脱自（exodos）に理解を示し常にその用意を整えている。そのありさまはさながら、この世にあるものに対し＜旅人にして居留者＞のようであり、自らの嗣業だけを心に留め、世俗的な事柄についてはすべて、他者に属すものと考えているのである。4) 彼は主の掟に驚嘆するだけでなく、言わば覚知そのものによって、神的な意志に与かるものである。かくして彼は真に主とその掟の親族であり、義人として選ばれた者であって、覚知者と



して主導的にして王的であり、地上・地下にある黄金のすべて、また地の端から海の端までの王国を心に留めない。それはただ主への奉仕にのみ専心するためである。5) それゆえ彼は、もし御言葉がそう選ぶのであれば、食べもし飲みもし結婚もするし、そればかりでなく夢も見、また聖なる事どもを行い考えもする。こうして彼は、祈りに向けて常に浄らかなのである。しかるに彼が天使たちとともに祈る事柄については、すでに<天使に等しい者として> (ルカ 20,36) 行うものであり、決して聖なる隊列から逸脱することがない。彼がたとえ一人で祈ろうとも、整えられた聖なる者たちの合唱隊を維持するのである。

7) この人は二重の信仰を知っている。それはまず、信じるものの働きであり、もう一方では信じられている事柄の相応しき卓越性である。なぜなら正義とは二重であり、一つは愛により、もう一つは畏れによるものだからである。79.1) 実に、次のように語られている。<主に対する畏れは、世々に及んで浄らかなまま留まる> (詩篇 18,10)。畏れから信仰と義へと回心した者たちは、永遠に留まるからである。言うまでもなく、畏れは悪からの離脱を遂げさせ、愛は自発性に基礎を置いた善行を勧告する。それは人が次のような主の声を聞くためである。<わたしはあなた方をもう僕とは呼ばず、友と呼ぶ> (ヨハネ 15,15)。彼はすでに、信じて祈りの道を進んでいる。2) しかるにその祈りの種類とは感謝である。その感謝とは、すでに過ぎ去ったこと・いま起こっていること・来たるべきことに対するものであり、将来の事柄も、信仰によってすでに現前している。この者にあっては、すでに覚知を獲得していると考えられる。3) 実際、彼は肉のうちに定められた生を、覚知者として、肉の身を離れた者として生きることがを願い、最上のものを獲得し、劣悪なものを回避できるように願う。4) その一方で彼は、われわれが過ちを犯した事柄に関しての救いと、認識に向けての回心を願う。こうして彼は敏速に、脱自に向けて招く方に対し、その方が招くとおりに付き随う。いわば善き良心とともに進み、その際に感謝を忘れぬように努め、キリストとともにあり、浄らかさをもって自らを適わしき者として提供し、キリストを通して先導する神の力を、一致をもって保持するのである。5) というのも、熱さを分有して熱くなるのでも、火に交わって輝くのもなく、覚知者は自らの全体が光であることを望むからである。この人は、次のように語られた句の意味を正確に知っている。<あなた方は、父親と母親、さらには自らの生命をも憎むのでなければ、そして十字架のしるしを担うのでなければ> (ルカ 14,26 以下)。6) つまりこの句は、快樂の呪縛を多く含む肉的

な執着を憎み、肉の仕業や肉の滋養にとって固有の事柄すべてを軽蔑するだけでなく、身体的な意味での靈魂をものともせず、＜肉が靈に反して欲情を抱く＞（ガラテヤ5,17）と言われるような、非理性的で反抗的な靈にくつわをかけなければ、の意味なのである。7) ＜十字架のしるしを担う＞とは＜死を身に帯びる＞との意であり、生きながらにして＜自らの持ち物をすべて捨てる＞（ルカ14,33）のでなければ、との意である。なぜなら肉を蒔いた者の愛と、靈魂を知に向けて創造した方の愛とは、等しいものではないからである。

80.1) この人は、善行を為す習慣のうちにあり、美しく語るよりも速やかに慈善の行為を行い、兄弟たちの過ちが、近しい者たちの告白と回心へと転じてくれることを祈る。その一方で自らの諸々の善き事どもについては、これをいとも親しき人々と分かち合うことを切に望む。一方人々のほうは、このようにして彼と友なのである。2) かくして彼は、主が命じたような方法で（マルコ4,20）自らが蒔いた種子を育てつつ、過ちを犯さぬように留まり、克己心に満ちた者となって、靈において似た者たちとともに、なお地上にあらうとも、聖なる者たちの合唱隊に加わるのである。3) この人は昼夜を問わず主の戒めを語っては行い、喜びに溢れる。それは、朝まだきと日中に立ち上がって行われるばかりでなく、歩いているときも寝ているときも、服を着るときも脱ぐときも、変わることがない。4) そして彼は子について次のように教える。もしその生まれにおいて子であるなら、掟と希望から離れることはなく、イザヤによって比喩的に語られているような讃美する動物の如くに（イザヤ6,2）、常に神に感謝を献げ、およそあらゆる試みに対して忍耐強い、と。5) 彼は言う。＜主が与えた。主が取り去る＞（ヨブ1,21）。6) ちょうどヨブがこのような人物であった。彼は、身体面での健康もあわせて、外的なものをすべて奪い取られたにもかかわらず、主への愛によってこれを意に懸けなかった。聖書は言う。＜彼は正しく、敬虔で、あらゆる悪行から遠ざかっていた＞（ヨブ1,1）。7) しかるに＜敬虔さ＞とは、すべての経緯を通じての、神の目からの正しき事どもを意味する。これらの事どもを知悉していたため、ヨブは覚知者であった。8) もし幸いなことであっても、人間的なことであればそれらに固執すべきではなく、またもし辛きことであっても、それらに苦痛を覚える必要はないはずである。覚知者はこれら双方に対して超越していなければならない。これらは、気に留めずに通り過ぎ、ないし必要とする者どもに分かち与えるべき事どもである。覚知者は、たまたまもたらされたような事柄に際しても危険に陥ることがなく、知らず知

らずのうちにその偶然性が恒常的状況となるようなことはないのである。

### XIII. 寛容から観想へ。

81.1) 彼は、自分に対して過ちを犯した人々のことをまったく覚えておらず、むしろ赦す。それゆえ彼は、次のような祈りを正しい仕方で行っている。〈われらが赦すように、われらを赦したまえ〉(マタイ 6,12)。2) このことも神が望むことのうちの一つであるが、それは、誰に対しても欲情を抱かず、誰をも憎むなということである。なぜならいかなる人間も、神の一なる意向の業だからである。3) そしてわれらの救い主は、覚知者が、〈天の父と同じように〉(マタイ 5,48)、すなわち主自身と同じように、〈完全な者〉となることを望んでいるのではないだろうか。この主は〈来たれ、子らよ、わたしから主に対する畏れを聞くがよい〉(詩篇 33,12) と述べる人である。主はこの覚知者が、もはや天使による助けを必要としない者となり、むしろ主自身から助けを得るに値する者となり、従順によって、主自身から保護を得ることを望んでいる。4) そのような者は、主から、願うのではなく要求することになる。そして覚知者は、苦しめる兄弟のために、分かち与えのための十分な財産を自ら願い求めるのではなく、彼らにとってその必要としているものが十分なだけ備えられるように、祈ることであろう。5) というのも覚知者は、必要としている人々に対して、このような形で祈りを与え、祈りを通じてのものを、気づかれずまた傲慢に陥ることもなく提供するからである。6) かくしてしばしば、貧困や病、その他そういった類の試みは、勧告のため、そして過ぎ去った事どもを正すため、また来たるべき事どもに注意を向けるために提供されることがある。7) 覚知者はこのようにして、こういった人たちのために慰めを求める。それは彼が卓越した覚知を備えているからであり、虚栄心ゆえではなく、覚知者であるというそのこと自体のために、自ら慈善的行為を実行し、神の善性のための道具となるためである。

82.1) さて『伝承』の中では、使徒のマッティアスが折にふれて次のように言っていると伝えられている。「もし選ばれた者の隣人が罪を犯したなら、それはその選ばれた者が罪を犯したのである。なぜならもし御言葉が命ずるとおりにその人が行動していたならば、その隣人は自らの生を恥じ、罪を犯さなくなっていたであろうから」。2) ではわれわれは、かの覚知者その人についてはどう述べることにしようか。使徒は次のように言う。〈あなた方は知らないのか。あなた方が神の殿堂であるということ〉

(1 コリント 3,16). 実に、覚知者は神的存在でありすでに聖なる者であって、神を宿し神の息吹を受けた人物である。3) 言うまでもなく聖書は、罪を犯すことを無縁なものとして示し、罪に陥った者どもを他の種族に売り渡している（士師 2,11-14）。一方聖書は＜他人の妻に対して、欲情をもって視線を注ぐな＞（マタイ 5,28）と述べて、罪が、言うまでもなく神の殿堂とは無縁でありその本性に反するということを語っている。4) しかるに教会の如きは、大きな殿堂であるが、アブラハムの種を宿した人間の如きは、小さな殿堂である。したがって神を宿したかたちで有する者は、決して他者に属するものを欲することはあるまい。5) かくして彼は、障害となるものをことごとく打ち棄て、彼の気を散逸させる質料をすべて蔑ろにし、知を通じ天に向かって道を切り進む。こうして彼は霊的な実体・根源のすべて・あらゆる権威を通過し、至高なるものの玉座に触れる。そして彼だけが知る、唯一なるものへと至るのである。6) かくして彼は、ヘビと鳩の性質を完全に両有し（マタイ 10,16）、良心に従って生き、将来の期待に向けて信仰と希望を混合させる。7) というのも彼は、自身が受けた賜物に対し、それを手にするに適う者となっていることを自覚し、隷属性を子としての性質と置き換え、知に伴う事どもを完遂し（＜神を知れる者は、神によって知られる＞（ガラテヤ 4,9））、その恩寵に相応しい形で自らの業を示すからである。なぜなら業は、影が身体に付き随うごとくに、覚知に伴うのであるから。

83.1) さて、彼はいかなる出来事に対しても決して心騒がせることがなく、また、経綸に従って生起する事柄が、益とならないかもしれないなどと疑うことも決してない。死に赴くことをも恥とせず、良心を持って権威者にまみえ、いわば靈魂のすべての染みに関して浄められている。そして死という脱自の後には、必ずや自身にとってより良いことが起こるであろうということを知っている。2) そこから、経綸の甘美さや有益性などを予め判断したりすることもなく、掟によって自らを鍛錬し、主に対してはすべてにおいて喜ばれる者となり、世に対しても賞賛に値する者でありたいと願う。なぜなら、すべては全能にして一なる神のもとに成立しているからである。聖書にはこう語られる。＜神の子は、自分の民のところへ来たが、民は彼を知らず、受け容れなかった＞（ヨハネ 1,11）。3) それゆえ彼は、世俗に属す事どもの活用の際しても、感謝を忘れず創造の業に驚嘆するばかりでなく、適わしき仕方で活用するとともに讃美を忘れない。なぜなら彼にあってその目標は、掟に則った覚知的な業により、観想に向けて画されるからである。4) この世にあってすでに、彼は知によって観想の路銀

を実りとして受けており、かつ高貴な仕方で観想の偉大さを獲得している。彼はさらに、(来世への) 移行という聖なる報償に向けて歩みを進める。なぜなら彼は『詩篇』がこう語るのを耳にしているからである。＜シオンを巡り、取り囲め。その塔に分け入ってみよ＞(詩篇 47,13 以下)。この聖句は、思うに、御言葉を崇高に受け取った者は、高い塔のようになるであろうこと、そして確固たる仕方で信仰と覚知のうちに立つてであろうことを比喩的に述べたものであろう。

#### XIV. 完徳に関する使徒の教え.

84.1) さて以上は、覚知者に関して可能な限り簡潔に、ギリシア人に対してかいつまんで述べたものだと思われたい。次に、このうちの一つないし二つを、誰かある信徒が直く実行しうるかどうかを調べねばならないが、その全体を同時に、ないし覚知者その人のように最高の知をもってなしうるかどうか、は問題ではない。2) まずわれわれにとって、いわば覚知者における無情動のあり方に関する点が必要である。この無情動によって、信じるものの完全性は、愛を通じ、＜完全な人間へ、成熟した年齢の域にまで＞(エフェソ 4,13) 進み行き到達する。その完全性とは神にも似たあり方であり、真に＜天使にも等しい＞(プラトン『ティマイオス』 176B) ものとなる。このことについては、聖書から多くのさまざまな証言を提示することが可能である。だがわたくしとしては、論述が長くなるため、そのような名誉欲は封印し、労苦しつつ聖書からの抜粋によって教義をつむぎだそうと欲する人々の手に委ねた方が良かろうと思う。3) そこでただ、次のことだけに言及しておきたい。それはその聖書箇所が参照されぬまま過ぎることのないようにするためである。神的な使徒は『コリントの教会に宛てた第一書簡』の中で、次のように述べている。それは＜あなた方の間で、一人が仲間の者と争いを起こしたとき、聖なる者たちに訴え出ずに、不正な人々の許に裁いてもらいに行くようなことをなぜするのか。あなた方は、聖なる人々が世を裁くということを知らないのか＞以下の部分である(1コリント 6,1 以下)。4) この箇所は極めて長大であるので、われわれとしては、使徒の語句のうち適切なものを用い、できるだけ簡潔にざっと表現をいわば言い換え、使徒の言わんとする趣旨を提示することにしよう。ここで使徒は覚知者の完全性について描写しているのである。5) 使徒は、不正を働くよりも不正を被るほうを選ぶ者として覚知者を提示するだけでなく、悪の記憶をも思い起こさずにあるべきだと教える。ただ不正を働く者のために祈ることまでは勧告していな

い。というのも彼は、主が単に＜敵のために祈れ＞（マタイ5,44）と命じているのを知悉しているからである。6) 不正を被った者が＜不正な人々の許で裁いてもらう＞ということは、報復を望み、再度不正を返そうと望んでいるように思われることに他ならない。これはその人自身が不正を犯すのと同様なのである。7) しかるに、ある人々が＜聖なる人々の許で裁かれる＞ことを望むと言っているのを使徒が引くのは、彼らが、祈りによって、不正を働いた人々に対して等しい報いが返されるように願う人々に他ならないということを明らかにし、第一の者たちよりも第二の者たちの方が優れているということを示すためである。ただ、彼らとて、いまだに無情動ではないのであって、主の教えに従って敵のためにも祈り、悪の記憶すら消し去らなければ完全な者とはならないのである。

85.1) さて、彼らが信仰に向かう回心により、美しき心ばえを持つようになることは美しいことである。というのももし真理が、妬みを抱く敵方をも獲得することを決めたなら、真理は何物にも敵対されないだろうからである。2) ＜神は、正しい者の上にも不正なる者の上にも自らの太陽を輝かせる＞（マタイ5,45）からであり、同じ主を正しい者の許にも不正なる者の許にも遣わしたからである。さらに、力づくで神に似た人となろうとする者は、悪の記憶をなくすことをこの上なく実行し、＜7の70倍まで赦せ＞（マタイ18,22）と命じられる（いわば、人生すべて、そして全宇宙のぐるりが、7という数字で表されているのである）。すなわちこれは、たとえ誰かがこの肉の身にある生涯のすべての時間を用いて覚知者に対して不正を働いたとしても、徹頭徹尾親切にせよ、との意である。3) これは、真摯なる者に対し、その者に不正を働いた人々の裁きを他者に委ねることを期待するばかりでなく、かの裁き手たちからも、正しき者は、彼に対して罪を犯した者どもの過ちの赦しを得ることを望むということの意味し、それは理に適ったことである。すなわちもしそれが外界のこと・身体に関わることに限られるのであれば、もしそれが死に至るまでに及ぶとしても、不正を手がける者が罪を犯すわけであって、そのいかなる部分も覚知者本人の業ではない。4) というのも誰か、かの福音にしろされた「悪を記憶せぬこと」に対する背教者となって、背教した天使たちを裁こうとする者があるだろうか。5) 使徒は言う。＜あなた方は、どうしてむしろ不正を被るままでいないのか＞（1コリント6,7以下）。＜どうしてむしろ、奪われるままでいないのか。それどころかあなた方はむしろ、不正を行っている＞。すなわちこれは、このようにして、無知から罪を犯している人々に対して報復がある

よう祈りをなしているのであり、＜あなた方は奪われている＞、すなわち神の人間愛と善性は、あなた方がその人々に報いを祈る分だけあなた方から奪われる、の意である。＜あなた方はそれを兄弟たちにも行っている＞、すなわち信仰上の兄弟に対してのみならず、改宗者たちに対しても、の意である。86.1) というのも、現在敵対している者も後になって信じるようになるのかどうか、われわれはまったく知ることができないからである。ここから明らかに言えることは、もしすべての人々がというわけではないにしても、少なくともわれわれは、兄弟であるように思われる必要があるということである。それはわれわれがすでに、すべての人々が一なる神の業であり、唯一の本質に基づく唯一の似像をまとっているからである。たとえ、たまたまある人々が、他の人々に優って秀でているにしても、ただ一人知に満ちる者だけは、被造物を通じて神の働きに、そしてその働きを通じて神の意向に膝をかがめるのである。

3) ＜あなた方はいったい、不正なる者どもが神の王国を嗣業として持つことができないということを知らないのか＞（1コリント6,9）。業によってであれ言葉によってであれ、あるいはそうしたいという想念によってであれ、報復を行おうとする者は不正を働くことになる。この想念については、律法による教育に続いては、福音が描き出している。4) ＜確かにあなた方のある者たちはそういった者たちであった＞（1コリント6,11）。彼らとはすなわち、あなた方がまだ知り合いになっていないような人々、の意である。

5) ＜しかしあなた方はすでに洗われている＞。つまりあなた方は、まったく他の人々のようではなく、むしろ覚知によって靈魂に関わる情動を投げ打ち、神の先慮の持つ善性に可能な限りにおいて、悪に耐え抜くことと悪を記憶に留めないことを通じ、神に似た者となることに努めている。＜正しき者にも不正なる者にも＞（マタイ5,45）、御言葉と主の業の優しさは、さながら太陽の如くに輝き出るのである。6) かくしてこのことを、寛容さによってであれ、あるいはより優れた者に対する模倣によってであれ、覚知者は成し遂げることであろう。三つ目の理由は、「あなたが赦せば、あなたも赦されるであろう」ということに関してであるが、これは掟があたかも、善性の溢れのゆえに救いに受けて強いる、ということである。7) だが＜あなた方は聖なる者であれ＞。つまり、この域にまで至った人間には、習性において聖であるということが適わしいのであり、いかなる情動にも、いかなるあり方においても陥ることなくあれ、の意である。むしろ彼は、いわば、すでに肉を伴わず、この地上を超越してしまったかのようなありさまである。87.1) それゆえ、彼は言う。＜あなたがたは主の名にお

いて義とされているのである> (1コリント 6,11). いわばあなた方は、主によってわたしと同じようにされている、との意である。そしてあなた方は、最大限その力によって<聖なる霊と混ぜられている> (1コリント 6,12 以下)。2) というのも彼は<わたしにはすべてができるわけではない。だがわたしはいかなる権威にも服属してはいない>、福音にしたがって為したり、考えたり、話したりすることにおいて、と言っている。<食物は腹のため、腹は食物のためにあるが、そのいずれをも神は滅ぼす>。すなわち、食するがままに考えたり生きたりする人々を、の意である。ただし、神の意にしたがい、あるいは先見にしたがい覚知に依拠して生きるために食す人々のことは決して滅ぼさない、という意味である。3) そして、そのような人々は、いわば聖なる身体の肉とも言うべきものだと言っている。主の教会、すなわち霊的にして聖なる合唱隊は、比喩的に「身体」と表現されている。だが彼らのうち、単に名においてそう呼ばれているだけで、御言葉に従って生きてはいない人々は「肉」なのである。4) しかるに<身体>、つまり霊的な身体すなわち聖なる教会は、<姦淫によることがない>、つまり福音から異邦人的な生に向けての離反によっては、いかなる方法においても決して立ち行かない、と述べられている。88.1) 教会の中にあっても、異邦人的な生き方をしている者は、教会と<自らの身体>に対して姦淫を犯している。それは行いにおいても言葉においても、そしてまさしく思いにおいても言えることである。2) こうして<娼婦と交わる者>、すなわち律法に抗して働く力に就く者は、聖でない別の体となり、<一つの体となって>、異邦人的な生・別の希望へと赴く。3) <一方、主に交わる者は一つの霊となり>、<霊的な身体となる>、すなわち別次元の集いとなる。このような「子」は、聖なる人間として完全に情動を免れており、覚知者であり、完全で、主の教えによって形作られている。この「子」は、業においても言葉においても霊そのものにおいても、主から離れぬ者となり、そのような円熟に達した者にあてがわれる住まいを獲得するに至る。4) 聞く耳を有する人々には、しるしだけで十分である。4) というのも神秘を持ち出すまでもなく、覚知に与かっている人々には、想起 (anamnēsis) に訴えて強調するだけで十分なのである。彼らは主によってどのように次の句が語られたのかを理解するであろう。<あなた方の父と同じように、あなた方も完全な者となるがよい> (マタイ 5,48)。過ちを完全に赦し、悪の記憶も留めない者たちは、無情動の習性のうちにも生きることになる。5) われわれは「完全な医者」「完全な哲学者」と言うが、ちょうどそのように、思うには「完全な覚知者」とも言える。



だがそれらのうちのどれも、たとえそれが最大のものであろうとも、「神」との類似性においてそう捉えられているわけではない。ただストア派と同様、われわれも神と同じ徳を人間について語ってもまったく無神論的ではあるまい。6) だから、われわれも父がそう望むように、完全な者となる務めがあるのではないだろうか。神がそうであるように完全な者となる、ということは不可能であるし為しえないことである。もともと父は、われわれが福音への恭順によって生活し、過つことなく完全な者となることを望んでいるのである。したがってもしわれわれが、語られた聖句の省略部分に関して、このメッセージを満たすために不可欠な事柄、すなわち理解する能力を持つ者たちには把握することが認められている事柄に、耳を傾けるならば、われわれは神の意向をわきまえ、掟に適うかたちで敬虔かつ高貴に生活することができるであろう。

#### XV. 諸派の間の見解の相違.

89.1) さて、次なる順序としては、ギリシア人たちおよびユダヤ人たちによってわれわれに提示された批判に弁明すべきであろう。しかるに真なる教えをめぐる異端諸派もまた、難問のうちのいくつかに関しては、既述したのと同様の仕方に取り組んでいる。そこでまずは、障害となっている事柄を解決し、難問の解決のための準備を整えてから、後に続く『ストロマテイス』に進むのが好都合であろう。

2) まず彼ら〔ギリシア人、ユダヤ人〕がわれわれに対して問いかけて言うことには、異端諸派の見解が一致していないのだから、信じるには当たらない、という点がある。互いに異なった教説を出し合うような人々のどこに、真理が見出されると言うのか、と。しかし彼らに対してわれわれは次のように言おう。あなた方ユダヤ人の間にも、またギリシア人哲学者の最も著名なる人々の間にも、幾多の異端諸派が成立したではないか、と。それなのにあなた方は、あなた方の許なる異端諸派相互の不一致のゆえに、哲学するのを躊躇すべきだとかユダヤ教に改修するのを考え直すべきだとかいうことは、決して言わない。4) そして異端諸派が真理に混ぜて蒔かれているということは、ちょうど小麦の中に毒麦が混ぜて蒔かれているという比喻でもって（マタイ13,25）、主によって預言的に語られている。したがって、前もって語られたことが成就しないわけには行かないのである。そしてその原因は、すべて美しいものには非難が伴うということにある。

90.1) いったい、たとえば誰かが取り決めに侵したり、われわれによる信仰告白を

蔑ろにしたりするならば、その偽りを述べる者によって、われわれも真理の告白にまで至りつく、ということはないだろうか。2) われわれもまた、公正な事柄を偽ってではなく、約束した事柄を無視すべきではないがゆえに、たとえ他のある者どもがその取り決めを侵そうと、いかなる仕方においても、教会の規準を蔑ろにすることは認められない。しかもわれわれは、最大の事柄についての告白を守り抜くのであるが、異端諸派はそれを侵すのである。実に、真理にしっかりと就いて離れない人々に信を置くべきである。3) しかるに、すでにこの弁明を広い意味で用いる人々には、彼らに向かって次のように述べることができる。すなわち医者たちに関しても、同じ治療に携わっていながら、個々の派によって、相対立する見解を抱くことがある、と。4) いたい、身体を病み、治療を必要とする人が、医術上の見解の違いゆえに医師の許に赴かないということがあり得るだろうか。霊魂を病み、幻影に苛まれている者は、健康になり神の許へと回心するために、異端であるということを持ち出して口実にしたりはしないだろう。5) 実に使徒は＜正統なる者のために異端がある＞（1 コリント 11,19）と述べている。ここで「正統なる者」とは、信仰に達した者の意であり、主の教えに対して、より選び抜かれた形で歩みを進めた者を指している。それはちょうど、主の真正なる貨幣を贋金から見分ける正統な両替商たちのようなものである。すなわち、信仰そのもののうちに、生においても覚知においてもすでに正統なる者となった人々を指しているのである。

91.1) かくしてわれわれは、どのようにして正しく確実に生きるべきか、真の意味での敬神の念とはどのようなものかを検証するために、より大いなる注意深さと洞察とを必要とする。それゆえ真理の獲得は困難かつ厄介であるために、次のような問いが生ずることは明らかである。「自己愛的な、また名誉欲に溢れた異端諸派はどこから生ずるのか。彼らは真に学んだのではなく、また真に信仰を獲得したのでもなく、単に覚知の虚栄心だけを受け取ったのではないか」と。3) さて、真なる真理とは、数多くの考察を通じて吟味されるべきものである。それは、ただそれだけが、真に存在する神に関わるような真理という意である。労苦には、甘美な発見と記憶とが相伴う。したがって異端諸派のため、発見の労苦に身をさらさねばならないが、決して途中で頓挫してはならない。4) 収穫がそこに置かれているわけではない。片や真にして熟した収穫、片や可能な限り精巧に作った蜜蝋製の偽物である。よく似ているために、双方に関してよく注意せねばならず、把握のための観想と可能な限り精密な推論でもつ

て、真理を外見上だけのものから識別せねばならない。5) ちょうど、一本の道は王の道であるのに対して、多くの他の道は断崖を通るものであり、また別の道は嵐にすさぶ大海や、入り江の深くなった海を通る道であるといったような状況であり、人はその多様性のために旅行を思いとどまるということはせず、むしろ危険の少ない王的で高速道路のような道を選ぶであろう。それとちょうど同じように、真理に関して諸派それぞれが異なったことを述べる状況の中で、退いてはならず、真理をめぐって最も精確な覚知を、周到な注意を払って追究せねばならない。6) 庭に植えられた野菜の間にも、一緒に雑草が育っている。だからといって、農夫が庭の手入れを差し控えるだろうか。7) だからわれわれは、語られた事どもを検証するために、自然から多くの端緒を得て真理の連関を見出すことに努めねばならない。8) かくしてわれわれは、もし信すべき人々に対して同意しなかったり、齟齬を来たしているものを識別しなかったりすれば、裁かれて当然であろう。すなわち、不適格で本性に反し虚偽であるものを、真理にして至当な連関のうちにあり適格で本性に適うものから識別せねばならないのである。これらは、真に存在する真理の認識のために（1テモ2,4）、端緒として用いねばならないのである。

92.1) したがって、ギリシア人たちによる上のような申し立ては無意味である。望む者たちには真理を発見することも可能であろうし、非合理的な理由を持ち出す者どもにとって、裁きには弁明する余地がない。2) 彼らは、明証があるということに対して、それを否定するだろうか、それとも同意するだろうか。思うに、感覚器官を滅ぼす人々以外、すべての人々が同意することだろう。3) しかるに明証があるならば、探究の次元に身を降下させ、聖書そのものから明証をもって学び取ることが必要である。それはまず一方では、異端諸派が雲散霧消するためであり、もう一方では、唯一にして真、そして古代に遡る教会のうちに、最も精密な覚知と、真に最良の選択を行う一派が見出されるためである。4) しかるに真理から逸れた人々のうち、ある人々は自分たちだけを欺こうとするが、また別の人々は、隣人たちをも欺こうと試みる。5) 前者は「知恵者のふりをする者」と呼ばれる者たちであり、真理を見出したと考えているものの、真なる明証をまったく有しておらず、自分たちは安らぎを得たと考えて、自らを欺いている人々である。彼らの大多数は、論駁のためにほとんど探究をも回避していて、認識のための教えをも遠ざけている。6) 一方後者は、近づいてくる者たちを欺き、極めて狡猾であり、自分たちは何も知らないということを理解していながら、

それでももっともらしい論拠でもって真理を覆い隠してしまう者どもである。思うに、もっともらしい論拠の本性と、真理の本性とはまったく別である。7) そしてわれわれは、異端という名称が、真理の反対語として語られるということを知っている。ソフィストたちは、人々を虐待するために彼らから離れ、自身で見出した人間的な術知に没頭し、教会ではなく議論の指導者であると豪語する者たちのことである。

## XVI. 真理の規準.

93.1) だが、最も美しき事どもに関して尽力する決意をした者たちは、聖書そのものから明証を得るまでは、真理を探究することを放棄しない。2) 実に、人間の判断規準には、たとえば感覚器官のように共通なものがある。しかるに真実なる事どもを望みそれに向けて修練する者たちにとっては、他の規準が存在する。それは理性と知解を通じて行われる術知に満ちたものであって、真理と虚偽とのロゴスに属するものである。3) しかるにその最大のものは、虚栄心を排除することであり、精確な知識と性急な見せ掛けの賢しさの中庸に立ち、永遠の休らいを望む方が、そのための入り口が労苦に満ち<狭く陰しい> (マタイ7,14) ものだを知っているということを認識する行為に他ならない。4) しかるに一たび福音を告げられ、<救い主を目にした> (ルカ2,30) 者は、その認識を得た時点において、もはや<ロトの妻のように後ろを振り返ることをせず> (創世19,26)、感覚的な事物に囚われていたかつての生を顧みることもせず、また諸々の異端に走ることもあってはならない。と言うのも彼らは、いずくとも知れず争いを繰り返し、真に在る方である神 (出エジプト3,14) を知らないからである。5) なぜなら<わたしにまさって父や母を愛する者は>、すなわち真なる父にして真理の師である方、生み出し創造し、選ばれた靈魂を慈しむ方をなおざりにする者は、<わたしに相応しくない> (マタイ10,37) と主が述べているからである。この方はここで、神の子、神の弟子、また神の友にして生まれを同じくする者に相応しいかどうかを述べている。6) <後ろを振り返りながら、自らの手を鋤に掛ける者は誰も、神の王国に相応しくない> (ルカ9,62) からである。

7) だが思われるに、多くの人々にはそして今日に至るまで、マリアは子の出産により経産婦であると考えられているようだが、彼女は経産婦ではない (彼女は出産の後、子を産んだにもかかわらずなお処女であることが確認されたとある人々は述べている)。94.1) われわれにとって、主の書物とはそのようなものである。すなわち、真

理を産み出した後もなお、真理の神秘を隠し、処女のまま留まる。2) 聖書は述べる。＜彼女は子を産んだが、産んでいない＞。これは、彼女が交合によらず、あたかも自ら懐妊したかのようだという意味である。3) それゆえ聖書は、覚知者たちのためには懐妊するが、異端者たちは、自分たちが、あたかも懐妊していないものであるかのようには聖書を排斥しているということに気づかずにいる。4) しかるにすべての人々が同じ判断をしたとしても、ある人々は説得的な御言葉に従い、信仰を打ち立てるのに対して、自らを快樂に委ねた人々は、聖書を欲情に向けて曲解する。5) だが思うに、真理を愛する者は靈魂の強靱さを必要とする。最大の難問を手がけても、もし真理そのものから真理の規準を得て保持していなければ、大いに躓くのが必定である。6) だがそのような者たちは、真直ぐな道から逸れるために、部分に関わる事柄の大部分においてもなお、おそらくは躓くことであろう。必須の事柄を、正確に選択するために研ぎ澄まされた真偽の規準を所持していないためである。彼らがもしこれを所持していたならば、神的な聖書に従ったことであろうに。

95.1) たとえば、誰かある人間が、キルケによって呪いをかけられた部下どもさながらに、獣と化したとしよう（ホムス『ヂェツセア』10.233 以下）。ちょうどそれと同じように、教会の伝承に異を唱え、人間の作った異端諸派の教説に奔る者があつたとすれば、この人間は神の人であること・主を信じて疑わないことを止めてしまう。2) しかるにこのような迷妄から再度醒めた者は、聖書に耳を傾け自らの生を真理に向けなおし、いわば人間から神へと創りかえられる。3) われわれは教えの根源を有している。それは主が、預言者たち・福音・幸いなる使徒たちを通じてくさまざまな仕方で、多様に＞（ヘブライ 1,1）最初から最後まで覚知を導くということである。4) この根本義に対して、もし誰か、異なったものが必要だという説を立てる者があれば、もはやこの根本義は真に守られることがない。したがって、自ら主の書き物と声とに信を置く者は、主を通じ人間の善行のために働くものとして、当然この声に信頼を寄せるのである。5) 言うまでもなくわれわれは、諸々の問題の発見のため、この声を規範としこれに依拠する。しかし裁かれるものは、裁きを受けるまではすべて、なお信には値しない。したがって、裁きを必要とするものは根源ではありえない。6) したがって、相応しくも信仰により、根本義を証明不要なものとして抱くわれわれは、その根本義に関する証明を根源そのものから豊かに得て、主の声により真理の認識に向け（1 テモテ 2,4）教育される。7) われわれは、信仰を表明する人々とだけ接しているわけではない。彼

らとて、正反対の表明をすることもあり得る。8) しかるにもし、思いなしを語ることでだけでは充分ではなく、語った事柄を信用せしめなければならないのだとすれば、われわれは人間からの証言を待つのではなく、求めている事柄を主の声に委ねようではないか。この声はいかなる論証よりも信頼性に富む。否むしろ、ただこの声だけで明証として充分なのである。9) この知識にしたがってただ聖書だけを味わう者たちは信仰厚く、さらに歩みを進めて真理をめぐる精確な知者となる者たちは、覚知者と呼ばれる。なぜならこの生活界の事どもに関しても、専門家たちは素人よりも何がしか豊かなものを持ち、一般的な想念に加えてより優れたものを打ち出すからである。96.1) かくしてわれわれもまた、聖書に関しては聖書そのものから十全に実証を果たし、信仰から出発して実証性とともに信じようではないか。2) たとえ異端諸派に付き随う者どもも、預言者の書を敢えて用いようとも、まずはそのすべてについてではないし、次いで完全に用いるわけではない。そして預言の総体とその網状の体系が示唆しているようにではなく、謎めかした言い方で語られている事柄を抽出しては自らの教説に向けて曲解し、わずかな声をつまみ食いの的に摘むばかりで、預言者たちによって何が意味されているかを追究せずに、単に字句をなぞるに過ぎないのである。3) というのも、引用されているほとんどすべての語句において、彼ら異端者がほんの表面的な名目にだけ注意を向けているのが明白であり、意味している事柄についてはなおざりにし、どうしてそのように語られているか、あるいはそもそもそれがどのような次第であるのか、といった点については知ることなく、単に彼らが持ち歩いている撰文集に拠っているだけなのである。4) しかしながら真理は、意味されている事柄を変改することのうちにではなく(彼らは真なる教えをすべてこのようにして覆すのであろう)、むしろ、主にとって、また全能の神にとって、何が完全に固有の本来的な事柄であるのかを十全に吟味することのうちに見出される。これは、聖書によって実証される事柄の各々を、再度似た諸書から確証する際にも変わることはない。5) かくして、彼らは真理に向けて回心することを望まないし、自己愛で得た利得を放棄することを恥じ、自らの名誉をどのように処したらよいのか、その方法を知らず、聖書を曲解するのである。そこで彼らは人々の間に偽りの教説を先んじて広め、ほとんど聖書全編にわたって公然とこれに反旗を翻し、彼らに抗するわれわれによって常に論駁されている。そしてあとは、昔も今も変わらず、預言者の書の一部を敢えて認めようとせず、われわれに対しては、預言者たちに固有の事柄を理解できない異なった本性の持ち主である

として攻撃する。時には、彼ら自身の教説が論駁されることを否定する。これは言うまでもなく、彼らが自ら学んだと自慢している事柄について、真相を告白するのを恥じているのである。97.1) かくして、異端諸派すべてに関して、彼らの教義の倒錯が顕著であるのを見ることができる。彼らが聖書に対して明らかに抵触しているのをわれわれが指摘し、彼らが狼狽する際には、その教義を主唱する人々によって、二つの事柄が不一致を来たしているのを見て取ることができる。2) それは彼ら自身の教義の連関か、もしくは預言そのものか、そのどちらかである。彼らは自身の希望（つまり預言）をむしろ軽んじ、折に触れ、主によって預言者たちを通じ、福音を通じ、さらに加えては使徒たちによって語られた事柄よりも、彼ら自身に栄誉が目に見える形で帰せられることのほうを選択する。3) かくして彼らは、自身にとっての危険は、一つの教義についてのみならず、異端一派を維持してゆくことに関するものだと見なすのである。彼らは、真理を発見することよりも（彼らは、われわれが奉ずる明らかで容易な事柄を目にすると、これを安っぽいとして軽蔑する）、むしろ共通の信仰を踏み越えることに熱心となり、真理から逸脱する。4) というのも彼らは、教會的な覚知の神秘を学ぶことなく、真理の高貴さを受け容れることもせず、事物の根底にまで降りて究めることを半ばで放棄し、聖書を表面的に読むだけで放り出してしまふのである。98.1) かくして彼らは虚栄の知恵によって舞い上がってしまい、終始論争を止めることがない、したがって、哲学することよりもむしろ栄誉を求めることのほうを優先させているのだということが明らかとなるのである。2) 言うまでもなく彼らは、人間的な栄誉に動かされているため、物事の必要不可欠な根源を据えておらず、そこから必然的に、彼ら自身に付き随うという最終目標をでっち上げる。かくして彼らは、真なる哲学を手がける人々に対し、論駁のために論争を仕掛ける。そしてすべてを向こう見ずにも試み、彼らが言うには、すべての美を動かし、聖書を信じないがためにたとえ不敬虔に陥ろうとも、自身が変えられることよりもこちらを選ぶ。これは、異端の名誉欲と、悪名高き彼らの教會の筆頭席のために行われるものであり、そのために彼らは、偽りの名の許に行われる愛餐の上席を奪い合うのである。3) しかるにわれわれにおける真理の認識は、すでに信じている人々からいまだに信じていない人々にむけて信仰を供するものであり、この信仰こそが、いわば明証のための本質である。4) しかしながら思われるに、すべての異端はそもそも、有益な事柄に耳傾ける耳を持たず、単に快樂に関わることどもに開かれているだけである。たとえ彼らのうちの誰かが、

真理に従おうとすら願わずとも、癒されることであろうから。5) 思いなしに対する癒しのあり方は三重になっている。すなわちそれはすべての情動に対してのものと同様であり、原因を学ぶこと、それがどのようにすれば取り除かれるかを学ぶこと、そして三番目には、靈魂の修練と正しい仕方生きようとの裁きに付き随うことのできる習性、以上の三種である。99.1) というのも混乱した目と同様に、本性に反した教義のために濁った靈魂は、真理の光を正確に見ることができないばかりでなく、足許の物についても見逃してしまう。実に、濁った水の中にいるウナギは、盲目となって捕らえられると言われている（アリストテレス『動物誌』592A6 以下）。2) また、悪しき子供たちが訓導者を閉め出してしまうのと同じように、この者たちは、論駁と警告のために疑念を抱かれると、教会の預言を自分たちから遠ざけてしまう。3) もちろん彼らは数多くの偽りやでっち上げを捏造するが、それは巧みに、聖書を受け入れないでも済むようにするためである。4) このような具合で、彼らは敬虔とは程遠く、神の掟、すなわち聖靈に対して不満を漏らす。5) ちょうどアーモンドの木が、実の中に何も入っておらず、むしろ中のものが無用であれば無に等しいと言われるのと同じように、神の意向とキリストの伝承を収めていない異端諸派は無に等しいとわれわれは言う。まったく彼らは、真理の輝きのために彼らが排したり隠したりすることのできないもの以外、野生のアーモンドの実の如くに苦い教義を主唱しているのである。

100.1) たとえば戦闘においては、将軍が兵士たちのために敷いた隊列を放棄することとは許されない。ちょうどそれと同じように、われわれが覚知また生のための指揮官として頂いている御言葉も、隊列を放棄することを許さない。2) しかるに多くの人々は、何に、いかなるあり方で、またどのようにして付き随うべきかということをよく吟味しない。3) 御言葉がそうであるように、信ずる者にとって、ちょうどそのように生があることが相応しい。それは<神に付き随う>（プラトン『法律』716A）ことができるためである。神は、原初よりすべてを<真っ直ぐに完成させて>いる方だからである。4) もし誰かが御言葉を蔑ろにし、それに伴って神を冒瀆することがあれば、永久に何らかの幻想に額づくほどに脆弱である場合には、直ちにこの幻想を理性的なものにすべきである。だがすでに取り付いてしまった習性によってこの人が打ち負かされ、（聖書に記されているように）<卑しく>（出エジプト1,7）なっている場合には、この習慣を徹頭徹尾廃絶すべきであり、靈魂がこの習慣に対して抗することができるように鍛錬すべきである。5) 一方もしある人々が、相反する教説に引きずられているよ



うに思える場合には、この教説を破棄し、＜平和をもたらす＞（マタイ5,9）教説へと歩むべきである。これらの教説は、神的な聖書にのせて歌い、未経験な者たちの恐れを抑える働きがある。その際に真理を、律法のつながりから明らかにするものである。6) けれども思われるに、われわれは真理よりもむしろ、たとえそれが教えに逆行するものであっても、榮譽に満ちた教えに向かいがちである。恐れに満ちて荘厳であるがゆえに。

7) さて、靈魂の状態には三種がある。それは無知、思い込み、そして知識である。異民は無知のうちにあり、真なる教会は知識のうちにあり、異端に従う人々は思い込みのうちにある。101.1) 実に、知を有する人が、知っている事柄に関して主張するとき、もし主張するに際して明証を欠くならば、思っている人がその思っている事柄を扱う場合と比べ、何も明らかなことを知っていることにはならない。2) 彼らは互いに軽蔑しあざ笑いあっているが、同じ心ばえが、ある人々にあっては極めて高貴なものとなるのに、ある人々にあっては狂気に取り付かれていることになる。3) またわれわれは、異邦人たちに割り振られるべき快樂と、異端諸派に関係づけられるべき争い、教会に固有のものであるべき喜び、そして真理を巡る覚知者に与えられるべき朗らかさは、それぞれ異なるものであるということを学んでいる。4) たとえば、イスコマコスに付き随う者は自らを農夫にし、ランピスに師事する者は船乗りに、カリデモスに師事すれば将軍に、シモンに師事すれば騎士に、ペルディクスに師事すれば行商人に、クロビュロスに師事すれば料理人に、アルケラオスに師事すれば踊り手に、ホメロスに師事すれば詩人に、ピュロンに師事すれば論争家に、デモステネスに師事すれば弁論家に、クリュシッポスに師事すれば弁証家に、アリストテレスに指示すれば自然学者に、そしてプラトンに指示すれば哲学者になる。ちょうどそれと同じように、主に従い、彼によって与えられる預言に付き随う者は、師の像となって完全に完成されるに至り、肉のうちに歩む神となる。5) 実に、神が導くままに神に従うことをしない者どもは、かの高みから墜落する。神は＜神の息吹を受けた聖書＞（2 テモテ 3,6）に従って導くからである。6) 人が為す事柄は、数にすると極めて多くに上るが、あらゆる過ちの端緒としては、ほぼ二つが挙げられる。それは無知と弱さである（双方ともわれわれに関わる。一方は学ぶことを望まぬ者どもの仕業であり、もう一方は欲情を制しようとししないものの仕業である）。そしてこれらのうち前者は、それによって良き判断ができなくなるものであり、後者は、それによって正しく裁かれた事柄に付き従うこ

とができなくなるものである。7) 思念において欺かれた者は、良い行動ができなくなるであろう。それは彼がたとえ、知悉している事柄を実行する能力が十分にあると変わらない。また必要な事柄を判断する力のある者が、もしその業の実行において非力であるならば、自らを批判されぬように提供するということは不可能であろう。

102.1) したがって、各々の過ちに対して有用な教養というものは、二つの種類において伝達される。そのまず一つは覚知と聖書からの証言を明晰に証拠立てることであり、もう一つは信仰と畏れによって教授される、御言葉に従った修練である。これらの双方とも、完全な愛に向けて成長してゆくものである。2) というのも思うに、覚知者のこの世における到達目標とは二つ、すなわち知に満ちた観想と、その実践だからである。

かくしてこれらの異端の者たちにあっては、この「覚書」から学び取って自制心を働かせ、全能なる神のもとに立ち返ることを祈る。3) もし新たに語られた事どもに対し<ヘビのように耳をふさぎ> (詩篇 57,5 以下)、最も古くに遡る<歌に耳を傾けない>のであれば、彼らは神によって教育されるがよい。彼らは裁きに先立って、父祖以来の警告を被り、恥じ入りつつ回心するであろうが、粗暴な不従順によっておのれを持し、完全な裁きには投げ込まれないようにすることであろう。4) というのも「懲罰」と呼ばれるある種部分的な教育があり、われわれの多くは逸脱により、主の民から滑り落ちてそこへと陥る。5) しかしながら子供たちが師や父親から懲らしめを受けるように、われわれも先慮によって懲らしめを受ける。神は決して罰を加えない(罰というものは悪の仕返しであるから)。むしろ神は公的にも私的にも、凝らしめを受ける者たちにとって益となるように懲らしめを与えるのであるから。

6) 以上の事柄は、わたくしが、学びを愛する者たちのために、彼らが異端諸派への陥りやすさを免れられるように望んで提示したことである。彼らに蔓延しているものが、無学であれ愚かさであれ悪習であれ、それを何と呼ぶべきであろうとも、そこから彼らを引き離そうとわたくしは望むものである。その一方でわたくしは、まだ完全に治癒不可能になっているわけではない人々を説得しなおし、真理へと導くことを試み、これらの論述を手がけたものである。103.1) 真理に向けて促す事どもの端緒に対しても、耳を傾けることを拒む人々が存在する。実に、彼らはくだらないたわごとを語ることを試み、真理を誹謗する言葉を注ぎ出し、自分たち自身が諸々の事物の中で最大のものを知悉していると自認し、学びも、探究も、労苦もせず、事物のつながり

を見出そうともしない。このような倒錯に対して、人は憐れむかもしくは憎むかすることであろう。2) もし誰か、治癒が可能で、いわば火や銀のように、真理に属し、彼らの虚偽を燃やしつくす弁舌を有する者があれば、霊魂の声に聞き従うがよい。3) もし怠惰に流されて自ら真理をはねのけることがなければ、あるいは名誉を希求して無理に何か新たな事柄を始めようとするのでなければ、これは可能であろう。4) というのもある人々は、神的な書物に固有の明証を、聖書そのものから捻出することにはなおざりで、手ごろで自らの快樂に寄与するような点を抽出することに努める。一方名誉を希求する人々は、神的息吹を受けた御言葉に適う部分で、幸いなる使徒たちや教師たちによって伝えられてきた部分でさえ、他の異質な試みによって進んでこれを変改する。人間的な教えに立脚し、異端者の立場で神的な伝承を曲解するのである。6) 一体全体、かくも偉大な人々のなかに、すなわち教会の伝承にのっとりた覚知にと言う意味であるが、たとえばマルキオンや、プロディコスや、その他真直ぐな道を歩んでいない者どもの教説にとって、その占める余地がどれだけ存在するというのだろうか。7) というのも彼らは、その知恵において先行する人々を凌駕したわけではない。このことは、彼らによって本当に語られた事どものうちに見出すことができる。むしろ彼らに好まれたのは、先に説明された仕方が学び取れなかった場合のほうなのである。

104.1) かくしてわれわれの覚知者は、ただ独り、聖書のうちにおいて齢を重ね、使徒継承にして教会の保持する教説の正統性を守り、福音にしたがって真直ぐに生き、その明証を彼が追究するなら、律法と預言者たちから主によって伝えられ、彼はそれを見出すに至る。2) というのも思うに覚知者の生とは、主の伝承に従っての業であり言葉に他ならないのであるから。

3) しかしながら＜覚知がすべての人に備わっているわけではない＞（1 コリント 8,7）。使徒は語る。＜兄弟たちよ、わたしはあなたがたが次のことに関して無知であることを望まない＞（1 コリント 10,3 以下）。＜わたしたちの先祖はみな、雲の下におり、霊的な食物と飲み物とに与かっていた＞。ここで使徒は、御言葉を聞いている人々がすべて、覚知の偉大さに関して、業と言葉でそれを受け入れられたわけではないということを明らかに主張している。4) それゆえ彼は次のように付言する。＜しかし彼らのすべてが神の御心に適ったのではない＞（1 コリント 10,5）。この御言葉とは誰か。それは次のように述べる方である。＜なぜあなた方は、わたしのことを「主」と呼びながら、わた

しの父の御心を行わないのか> (マタイ7,21). すなわちこの「御心」とは救い主の教えであり、これこそわれわれにとっての霊的な食物であり (1 コリント 10,3), 渇きを覚えることのない飲み物であり (ヨハネ 4,14), 覚知に満ちた<生命の水>なのである (黙示録 21,6 ; 22,17). 5) 一方, 覚知は人を「高ぶらせる」と言われているのではないか (1 コリント 8,1), と使徒の言葉を引く人がある. 彼らに対してわれわれはこう言おう. もしこの「高ぶらせる」(physioun) という語彙が, 膨れ上がるという意味で解釈されると受け取る者があれば, おそらくは見せかけの覚知が語られているのであろう. しかしながら, おそらくはこちらのほうの蓋然性が高いが, 使徒の言葉が「大いなるかたちで真に思慮を働かせる」ということを告げているのであれば, 困難は解消されるであろう. かくしてわれわれは聖書に付き従い, 語られている事柄を承認しようではないか.

105.1) ソロモンは言う. <智慧は, 自らの子供たちに息吹を吹き込む> (シラ 4,11). これは決して, 主がその教えによって若者たちを欺くという意味ではない. むしろ真理を信じさせ, 聖書によって伝えられる覚知のうちに気高くし, 罪に引き摺り下ろす事どもを蔑むように整えるとの意味である. このことを表すのが「息吹を吹き込む」(physioun) という語彙であり, 学びに従う子供たちに智慧の気高さを, その教える事柄を通じて吹き込むということなのである. 2) 言うまでもなく使徒はこう述べている. <わたしは, 高ぶっている人々の言葉でなく力を知らせてもらおう> (1 コリント 4,19). これは, もし気高い心で (真理に基づいて, の意味である. 真理よりも偉大なものは存在しないのだから), あなた方が聖書を理解すれば, の意味である. この世での力とは, 息吹を吹き込まれた子供たちの知恵のうちにあるのだから. 2) 思うに, 彼が言うのは「もし覚知に基づき, 正当に気高く思慮を大いに働かせれば」という意味であろう. なぜならダビデによれば, <ユダの地にあつて覚知に満ちた者, それは神> (詩篇 75,2) すなわち, 認識に基づくイスラエル人にとっての覚知とは神に他ならない, との意味である. 4) なぜならユダヤとは「告白」という意味に解されるからである. かくして, 使徒によって次のように語られているのも相応しいことであろう. <姦淫するな, 盗むな, 欲情を抱くな, あるいはその他の掟は, 「あなたの隣人をあなた自身と同じように愛せ」という言葉のうちに集約されている> (ローマ 13,9). 5) 実際, 異端に従う人々が行っているように, 真理に対して姦淫したり, 教会の規範を盗んだりすべきではないし, 隣人を欺くために自分自身の欲情や名誉欲を用いるべきでもない. むしろ彼らは, 何にも増して真理そのものから離れないようにすることを愛し学ぶの

が適切なのである。6) 言うまでもなく、次のように語られている。＜諸国民の間で主の御業を告げ知らせよ＞（詩篇 9,12）。これは彼らが裁きを受けないようにするためであり、事前に耳傾けて回心するようにするためなのである。＜その舌で欺く者ども＞（詩篇 13,3）は、明確なあり方で記された処罰を有するのである。

## XVII. 諸派と教会の歴史.

106.1) さて、不敬なる者のうちある人々は、御言葉に関わりながらも、とりわけ、良く神の御言葉を把握しておらず、むしろ誤りに満ちた仕方でこれを用いている。すなわち彼ら自身が天の王国に入っていないばかりか、彼らが欺く人々に対しても、真理を獲得することを許さないでいる。2) 否むしろ彼ら自身、天の王国に入っていないし、彼らが欺く人々にも、真理を掴むことを許さない。2) それどころか彼らは入国のための鍵すら手にしていない。彼らが持っているのは偽りの鍵であって、習慣的に言われている呼び名では、それは「さかさ鍵」というものである。そのさかさ鍵でもって、彼らはカーテンを開こうとせず、その様はわれわれが主の伝承を通じて入国するのとは異なる。むしろ彼らは抜け道を設けておき、ひそかに教会の壁に穴を掘って、真理を乗り越え、不敬なる者どもの靈魂の秘儀導入者となっている。3) 彼らの設けたものが、普遍的（katholikos）教会よりも後の時代の人間的な集会であるということについては、多言を要しない。4) というのも主の来臨に関する教えは、アウグストゥス帝とティベリウス帝に始まり、諸皇帝の時代を中にはさんで完結する。一方主の使徒たちの教えは、パウロによる宣教に始まってネロ帝の頃に終わる。一方異端の教説を奉ずる者たちは、下って皇帝ハドリアヌスの時期に成立し、アントニヌス・ピウス帝の時代にまで及ぶ。それはたとえばバシレイデスが、彼らの誇るように、もし師にペトロの解釈者であるグラウキアの名を冠するのであれば、そうである。同様にワアレन्ティノスも、テウダス（使徒行録 5,36）の教えを聞いたと言われている。確かにテウダスはパウロの弟子であった。107.1) またマルキオンは、彼らと同じ時代に、より年少の者たちにとっての長老となった人物である。その少し後にシモンが、ペトロが宣教するのを聞いている。2) 彼らについては以上のような次第であるので、これらの諸派が、最も古代に遡り最も真理を宿す教会よりも後の時代の成立になるものであることは明白である。そしてさらに、時代的にこれらの者どもの後に捏造された異端諸派が新たに成立している。3) 以上述べた事柄から、わたくしとしては、真に古代に

遡る真の教会は、唯一のものとして生まれたということが明らかであると考え、この教会に向け、公に義人である者たちが選ばれる。4) というのも神はただ一者、主はただ一人であり、それゆえに真に高貴なる存在もその一性をもって讃えられるものであり、それはその支配が一なるものであることを模倣するからである。かくして唯一なる教会は、この一なる本性を嗣業として継承し、この教会が幾多の異端に割かれるべく強いられているのである。5) したがってその実体 (hypostasis) においても、その理念 (epinoia) においても、その根源性においても、その卓越性においても、古代に遡り普遍的な教会は唯一つであるとわれわれは表明する。この教会は＜信仰の一性＞(エフェソ 4,13) に向けて成長するものであって、その信仰とは固有の掟に則るものである。否むしろ、様々な時代を貫いて唯一なる掟に則ると言うべきであり、この教会は、唯一なる神の意向に従い唯一なる主を通じて、すでにその下に配された者たちを集めるものである。この人々は神が予め定めた者で、世の創造以前から義なる者となるであろうことを神は知っていたのである。6) だがそればかりでなく、教会の卓越性は、その存立の根源性と同様、一者に基づくものであり、他のすべてのものを越え、自らと同様の、ないし等しい存在をまったく有さないのである。

108.1) この事柄については後ほど再説する。異端諸派のうち、あるものはその創始者の名をとって呼ばれているものである。たとえば「ウァレンティノス派」「マルキオン派」「バシレイデス派」などであり、彼らがマッティアスの栄誉(使徒行録 1,26)を傲然と持ち出そうとも、これは変わらない。なぜならすべての使徒たちの教えとなったのは一つであり、その伝承も一つだからである。2) 異端諸派のうち、また別のもはその場所をもって名づけられる。たとえば(ユーフラテス川の)「対岸派」がそうである。またあるものはその民族名をもって呼ばれる。たとえば「フリュギア派」がそうである。また別のもはその活動をもって語られる。たとえば「克己派」がそうである。またあるものはその独自の教説をもって呼ばれる。「仮現論派」や「血潮派」がそうである。またあるものは、その仮説ないし彼らの崇敬する人々をもって名づけられる。たとえば「カイン派」あるいは「ヘビ崇敬派」と呼ばれるものがそうである。またあるものは、彼らが違法的に手がけ敢行している事柄から名づけられる。たとえばシモン派のうち「合体派」と呼ばれるものがそうである。

## XVIII. 諸派の不純性.

109.1) われわれとしては、いわば屋根穴を少しばかり、「真理を觀照することを愛する者たち」(プラトン『国家』475E)のために提示することにしよう。それは生贄をめぐる、一般のユダヤ人たちについて、および不可思議な仕方で神的な教会から、不浄なるあり方ゆえに分岐した異端諸派について記し、記述を終えようとするからである。2) まず、ひづめが分かれ反芻行為を行う生贄の動物は、浄らかであり神に受け入れられると聖書は伝えている(レビ 11,3 以下)。これはいわば、信仰を通じて父と子に向けて歩みを進める者たちのものである(これこそ、ひづめが分かれたものどもの堅固さである)。彼らは<神の言葉を>(ローマ 3,2) <夜も昼も思い起こし>(詩篇 1,2)、靈魂という学びの壺の中で思い返す者どもである。浄らかな動物のこのような修練は覺知に満ちたものであり、これを律法は「反芻」として比喩的に表現しているのである。3) しかるにこれらのうちのどちらも、ないしどちらかを有していない動物を、律法は「不浄なるもの」として区別している。すなわち反芻するもののひづめが分かれていないものとして、律法は幾多のユダヤ人を暗示している。彼らは神の言葉を口に上せはするものの、信仰と、子を通して父に向かう、真理に支えられた基礎を持たないからである。4) それ故このような動物の種族は躓きやすく、いわば信仰の二重性に支えられた、ひづめの分かれた動物でもないのである。主はこう述べる。<子と、子が啓示する者を除いては、誰も父を知らない>(ルカ 10,22)。5) また同様に、次のような動物も同様に不浄である。それはひづめは分かれているものの、反芻行為をしない動物である。6) これはすなわち異端諸派を表したものであり、彼らは父と子の名に立脚するものの、御言葉を精確なかたちで明らかにすることに務め刻苦勉励するだけの力に欠けるのである。さらに加えては、正義の業に関し、たとえ携わったとしても大まかで、正確を期した形で遂行することがない。110.1) およそこのような者たちに対して主はこう述べている。<あなた方はどうして、わたしに向かって「主よ、主よ」と言いながら、わたしの言うことを実行しないのか>(ルカ 6,46)。すなわち、ひづめが分かれてもいないし反芻行為を行うこともない者どもは、まったく不浄なのである。

「お前たちは、おおメガラ人たちよ」

テオグニスは言っている。

「三番目にも四番目にも、

十二番目にも入らず、話題にも、数のうちにも入らない」

(フォティオス『図書総覧』 618)。

3) <むしろ、風が地の表面から吹き飛ばすちりのようだ> (詩篇 1,4). そして<つぼから落ちるしずくのようだ> (伊<sup>ヤ</sup>40,15).

4) 以上、ここまでわたくしが述べてきた事柄は、要点をかいつまんで描き出した倫理的な諸問題でもある。われわれは、最初に約束したとおり、あちらまたこちらと取り留めなく、真なる覚知の教説に属する火花を撒いてきた。秘儀に与かったことのない初心者には、聖なる伝承の発見を安易になしえないようにするためであり、今われわれは約束に戻ることにしよう。111.1) おそらくこの『ストロマテイス』(「綴織」)は、見栄えを良くするために列を整えて植樹され飾られた楽園には見えないであろう。むしろ言わば陰深く生い茂り、糸杉やプラタナス、月桂樹や蔦、あるいはリンゴやオリーブ、イチジクなどの植わった山に似るであろうか。この果樹園には意図的に、実りをもたらす木も実りを為さない木も混ざっている。それは、熟した実りを奪い取ったり盗んだりする者どもに対し、論述のありようがその目をくらますようにと意図してのことである。2) ここから農夫は、移し変えたり植え直したりして、見目麗しき楽園・甘美な森を作り上げられるがよかろう。3) この『ストロマテイス』は、秩序だった体系や叙述を目指したものではない。これは文体の点でも、ギリシア人たちが望ましいとし、教説を植えることを忘れ、真理に則らずに行ってきたものとは異なるであろう。むしろ、もし読者を得たならば、労苦に値し豊かな発見をもたらすものとなるように意図したものなのである。魚の種類に応じて、餌の種類も多種多様であるべきだからである。

わたくしどもの『ストロマテイス』(「綴織」)第7巻は以上とし、これに続く巻の記述は、また異なった論点から行うことにしたい。